月刊もぐら通信

Mole Communication Monthly Magazine

２０２２年1月1日　第１１０号　初版　　www.abekobosplace.blogspot.jp

あなたへ:
迷う事のない迷路を通って
あなただけの番地に届きます

「こどものころ、はじめて「非ユークリッド空間」というものの存在を知ったとき、私はひじょうな不安ととまどいを感じたものだった。私にはまだ、現実そのものと現実の説明とを、区別する方がなかったのだ。平行線が交わる世界と、交わらない世界とが、同じ一つの世界であり、それぞれその同じもののちがった説明にしかすぎないなどという考えにどうしてもなじむことができなかった。」

（「記録と写実」全集第７巻、１３９ページ）：１９５７年４月２１日）

非ユークリッド空間として箱男

［日本文化をトポロジーで解説する「内なる辺境」シリーズ（６）：**凹に入れる**］

結局、私たちは、**包む、凹に入れる、仕切る**（切断ではない）**、通す、折りたたむ、仕舞ふ、窄（すぼ）める、巻く、絞**るのです。最初の包むから通すまでは幕の内弁当をつくるために必要な語彙でしたが、これらの中から**凹に入れる**を今回は取り上げて、様子を見てみませう。これらの言葉はみなお互ひに通じてゐて、共通の意味は**一筆書き**といふことであるのでした。いつもながら、大先生、小先生に何糞君　　に御登場願ひます。

何糞君：凹といふのは、一体凹に何を入れるのありませうか？そして、凹に何を入れるとは何を意味するのでせうか。

大先生：これも我らがことでありますから、凹が箱であれ、壺であれ、竹で編んだ籠であれ、袋であれ、

小先生：あれ？！何だか聞いてゐますと、風呂敷に包むのと大して変はらない話になりましたね。

大先生：さう、何しろトポロジー民族たる我らがことである。要するに素材は何でもいいのである。形象（イメージ）のみを問題にするのです。

何糞君：さう云へば、浦島太郎が故郷（ふるさと）への帰路、龍宮城の乙姫様から戴くのも玉手箱でしたね。しかし、これが風呂敷に包まれた何かであれば、途中で開けたくなりますから、箱にいれるといふのは密閉するといふ目的があるといふことになりませんか？

小先生：さう、そこがトポロジーのトポロジーたる所以であります。開口部が閉まつてしまつて開かないかといふと、さうではない。実に緩やかに開閉ができて、開いてゐるのやら閉ぢてゐるのやらいづれでもあるらむといふことになつてゐるのが、柔らかな素材で出来た凹形の文物です。それでは箱は如何かといふと、欧米の箱などは連続もののTVドラマで刑事物やら探偵物やらを見ると、いつも鍵穴がついてゐて、箱の所有者が鍵を携帯してゐる。私たちの箱にはまづ鍵穴はありませんね。

大先生：さう、さう、小先生の言葉で想ひ出しましたが、ドイツはミュンヘンなるドイツ博物館といふ博物館にて、中世の亭主が軍役に征く時に妻に装着した貞操帯といふものの実物を初めて見たことがありますが、まあ、これがなんといふことか、お相撲さんの腰廻りの帯に股くぐりの、今でいふTバックでありますな、しかし、これが鉄で出来てゐるのには、あたしあ、驚きましたよ。

小先生：鉄で出来てゐる！？

大先生：さう、さうしてT字の交差した腰の正面、臍のところに大きな鍵穴が開いてゐるのです。きつと、貴族なり領主なりの夫は遠征中に其の鍵を持参で出掛けて、その間妻たる女性は此のとんでもないものを下半身に装着して（本当に装着といふ言葉を漢語で言ふ以外にはない）夫の帰りを待つと云ふ図ですな。

熊公：あつ、なるほど、それぢやあ、彼の地の亭主といふのは自分の女房の秘所に鉄の門扉を立てて、おまけに鍵穴と鍵まで拵（こしら）へてるつてえのは、細い野郎か太い野郎かよく分からねえ。

『S・カルマ氏の犯罪』最後に登場する非ユークリッド空間を創造する映写機

大先生：（いつの間にか横丁の御隠居になる）また、熊さん、馬鹿をおいいでないよ。あれ、お前さん、いつの間に出てきたの？
熊公：へえ、あたしあ、安部公房のファンなんで。
大先生：小先生の前ですよ。品格を保ちなさい。ほれ、一度教へた通りに屁といはずに転失気と云ふが如しです。（大先生に戻つて続ける）といふわけでしてね、私の驚いたのは用便の配慮が全くないと云ふ作りになつてゐたことです。それあ、こんなのでは、フェミニズムなどと云ふ奇態な運動が起きるわけですよ。彼の地にては、男は女を人間とは思つてゐなかつたのですな。何といふ野蛮な世界であることか。
熊公：ところで、大先生、戦地で戦さをしてゐる時に、うつかりと鍵を落としてしまつたら、帰つて来て、一体これもどうしたものでせうね。帰つて来て鎧兜を脱いで、いざ鎌倉つてえ時に、あつ、鍵がないなんてえことになつたら、これは落語になりますぜ。
大先生：（御隠居になる）それあ、あなた、鍵屋にスペアキーを作らせておいたに違ひない。うちの長屋には鍵などなくて清々するねえ。
熊公：最大のリスク回避は貧乏に尽きるつてえもんで。文無しは門なし、なんてね。
大先生：（大先生に人格が戻る）それに比べると、箱根の寄木細工などと云ふ代物を見ると、やはり我らには鍵穴などと云ふ発想はないやうですね。その代わりに、呪文を掛けて継ぎ目のない連続的な箱細工に、それもさきほど述べたやうな籠の発想で、入れ籠構造にしてしまふと云ふ藝の細かさであります。

（いつの間にか安部公房が登場してゐる）

安部公房：さう、それが僕の小説の構造なんだね。そして、その閉鎖空間から一体どうやつて脱出するかと云ふことを数学的に考へること、これが実に面白いんだな。さうするとどうしても、僕が高校時代に覚えたトポロジーといふ数学で箱を開けて脱出するといふことになるんだよ。あれ、いや、奉天の子供のころだつたかな。さうかも知れない。別に寄木細工があるから、箱根に住んでゐるわけぢやないんだけれどね。さう、でも箱根といふのは凸凹の山また山の谷また谷だから、僕には住みやすい場所なんだ。今度君の目の前で透明人間になつて消えてみせるよ。きつと驚くと思ふな。それに何だね、大体僕はドイツ語を勉強したのだが、ドイツの隣国の敵フランスには『鉄仮面』などいふ小説があるだらう。あの小説の仮面とは男の貞操帯といふべきものだね。それで僕は『他人の顔』といふ小説を思ひ付いたのさ。ところで僕の仮説は『鉄仮面』の作者は女であるといふものだ。あの設定はどう考へても、男への復讐だね。でも、君ね、三島君、日本だつて鉄面皮つていふぢやないか。
三島由紀夫：ああ、僕の処女作『仮面の告白』の仮面は褌の左偏の衣（ころも）と心は同じだ。月光仮面といふのはあつたが、何故褌仮面といふのはないのだらう。
何糞君：糞も喰らへば皿までですが、そろそろ本題に戻りませんか？
大先生：何の話か忘れてしまふた。何でもエロスの話ではなかつたかな。さうさう、**凹に入れる**とは何かといふ高尚な話であつたな。位相幾何学（トポロジー）では**凹に入れる**ものは**凸なるもの**に決まつてゐるではないか。イザナギノ命とイザナミの命のあのおほらかなる位相幾何学的なセックスをみよ。天（あま）の御柱を垂直方向に立てて右にふたりして周廻した後、反対に均衡をとつて左に周廻してコトを致しますと、日本の島々が生まれるのである。右廻りでマイナス、左廻りでプラスで、大八島はニュートラルに生まれたのである。即ち穢れを祓つたのぢやな。これで高天原１と直通直結の島々であるな、秋津洲やまとの国は。

月光仮面

小先生：いや、しかし、大先生、それぢや、日本列島は最初から快楽列島ですね。なるほど、それで近頃のお笑ひ国会議員やノータリン経済界のお歴々や間抜けマスメディアの猿たちは、皆中国共産党の放つたくノ一に籠絡されて文字通りに腰砕けになつたといふわけですね。
何糞君：性てはコトを仕損じますね。
三島由紀夫：君ね、性（セックス）てえ奴は、大八島では『All Japanese are perverse』（日本人はみんな倒錯してゐる）なんだよ。僕が此のエッセイで予言した通りの日本になつただらう？何糞君、いよいよ君の出番だ。
（シナリオ・ライター独白：収集がつかなくなつたので、これでお開き）

『S・カルマ氏の犯罪』最後に登場する非ユークリッド空間を創造する映写機

もぐら通信

目次

０　表紙：日本文化をトポロジーで解説する「内なる辺境」シリーズ（６）：凹に入れる
１　目次…page ３
２　記録＆ニュース＆掲示板…page ４
３　『周辺飛行』論（２３）：写真のぞき――周辺飛行２０：岩田英哉…page １２
４　リルケの『オルフェウスへのソネット』を読む（５３）：第２部 XXVIII：”ああ、来い、そして去れ。お前、ほとんど子供であるお前よ、”：岩田英哉…page ２８
５　サンチョ・パンサを求めて（５）：安部公房と三島由紀夫の超越論を理解する方法：岩田英哉…page ４０
６　*Mole Hole Letter*（２４）：1+1=2：岩田英哉…page ４３
７　ネット・メディア論（４）：４.４　日本国の位相史上のネット・モナドの位置/４.５　ネット・モナドの対象とする国家と個人(persoal)による監視・調査項目：岩田英哉…page ４８
８　縄文紀元論：Topologyで日本人を読み解く（３）：２。日本語の音義と概念の関係：五十音表とは何か：岩田英哉…page ６２
９　編集後記…page ６９
１０　次号予告…page ６９

・連載物・単発物次回以降予定一覧…page ６７
・本誌の主な献呈送付先…page ６９
・本誌の収蔵機関…page ７０
・編集方針…page ７０

PDFの検索フィールドにページ数を入力して検索すると、恰もスバル運動具店で買ったジャンプ･シューズを履いたかのように、あなたは『密会』の主人公となって、そのページにジャンプします。そこであなたが迷い込んで見るのはカーニヴァルの前夜祭。

ニュース＆記録＆掲示板

The best tweets 10 of the month

Golden Mole Prize

ぶちお@H0eru·Nov 29
安部公房を収集しなくては。(使命感)

Silver Mole Prize

志兎鷺@Shitosagi·Nov 28
安部公房が、小説というものは意味を考えながら読むのではなく、その世界を体験するものだと言っています。それを一番突き詰めたのはやはり川端康成でしょう。雪国には「美しい徒労」という言葉があります。全ては無意味な徒労に過ぎない。しかしその世界は美しい。それが芸術の極致だと思います。

今月の上演

劇研アクターズラボ@actorslabo·Nov 25
【京都／そばえ】
そばえinポーランドチームは、2グループに別れて出発です。今日、先発隊がポーランドへ発ちます。ワルシャワとポズナンで、安部公房「友達」を上演します！

今月の箱男（のモチーフ）

wakuwaku@wakwak_dokdok·Nov 24
初ハーフだけど安部公房がモチーフにしそうな写真撮れて満足

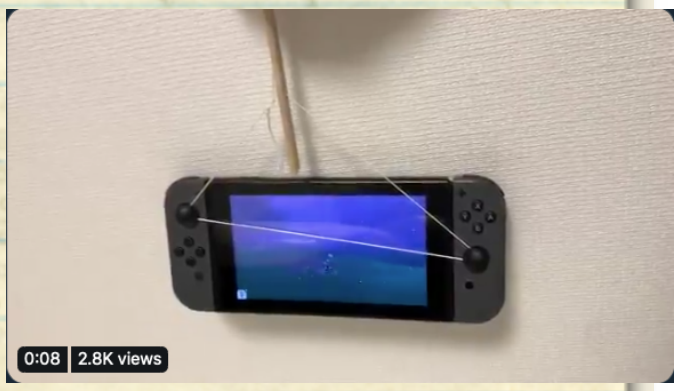
今月の他人の顔

橙@strangeorange81·Nov 26
安部公房を探せ！

今月の縄と棒

トモぞヴP@TomozoP·Nov 23

「なわ」は、「棒」とならんで、もっとも古い人間の「道具」の一つだった。



「棒」は、悪い空間を遠ざけるために、
「なわ」は、善い空間を引きよせるために、
人類が発明した、最初の友達だった。

「なわ」と「棒」は、人間のいるところならば、どこにでもいた。

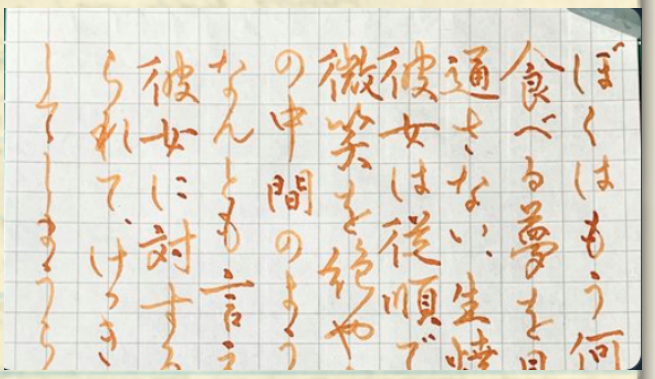
——安部公房 『なわ』

（ゲーム機会を入れる＊

今月の箱男になつてしまつた読者

大谷星弔🍁書家@ootani_seichou·Nov 24

3654 安部公房「箱男」より



今月のロブ=グリエ

小玉大輔@eigaoh2·Nov 25

「嘘をつく男」アラン・ロブ=グリエ監督第三作。シュマイザーの豪快なファイアリングで始まる安部公房の作品に近似の物語。これまで見てきたものを根底から覆し、真実と嘘の境界を溶かすエンディングにはびっくり。唐突に挿入されるヘルムート・ニュートンみたいな無言の幕間劇がとってもロブ=グリエ。

今月の近藤一弥

恵文社一乗寺店｜本にまつわるあれこれのお店　京都@keibunshabooks·Nov 22

近藤一弥さんは安部公房の装幀でもお馴染み。安部公房の世界観を具現化した装幀は当店でも長く愛されています。読書家の三船雅也さんとは、本に関するお話もしていただけそう。安部公房ファンの方にもぜひおすすめしたいイベントです。

今月の安部公房論

詩的文学論文bot@shiteki_bungaku·Nov 23
狂気の躍動--安部公房『密会』(特集 〈精神病院〉の文学)
https://ci.nii.ac.jp/naid/40019027292

詩的文学論文bot@shiteki_bungaku·Nov 23
安部公房『第四間氷期』--水のなかの革命
https://ci.nii.ac.jp/naid/120005481595

詩的文学論文bot@shiteki_bungaku·Nov 23
予言=権力：安部公房『第四間氷期』論
https://ci.nii.ac.jp/naid/40019842612

詩的文学論文bot@shiteki_bungaku·Nov 23
劣性の思想--安部公房『カンガルー・ノート』論
https://ci.nii.ac.jp/naid/120000980678

詩的文学論文bot@shiteki_bungaku·Nov 22
〈おれ〉の〈ユダヤ性〉にみる実存的状況：安部公房『赤い繭』論
https://ci.nii.ac.jp/naid/110000437716

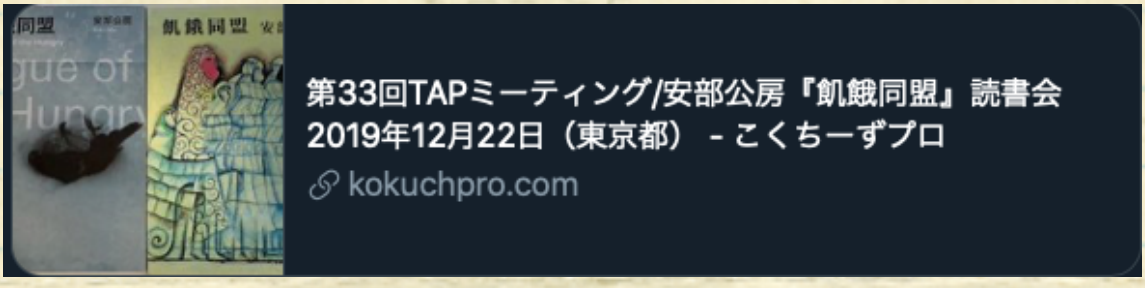
今月の安部公房座談

KeiG@keijimatsuyama·Nov 23
安部公房がみえる？

TSUKASA@zucker1756·Nov 20
この課題図書を果たして今年中に読めるだろうか📖まずは、今ある安部公房から…
ベネディクト・アンダーソン著「想像の共同体」
マッコロ・マキャベリ著「君主論」
橋川文三著「昭和維新試論」
安部公房著「方舟さくら丸」

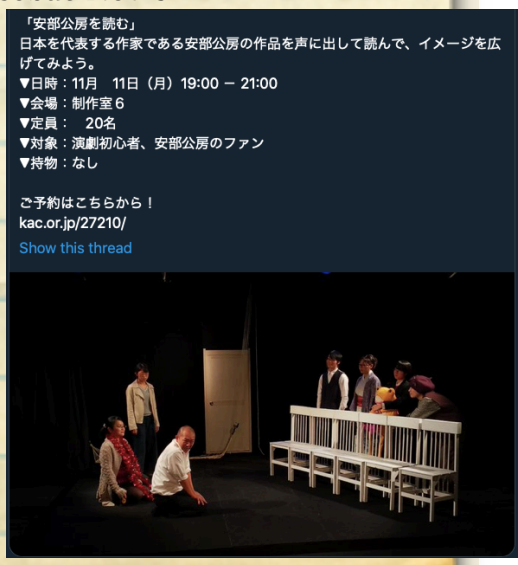
今月の読書会

ホッタタカシ@t_hotta·Nov 22
【安部公房読書会】1ヶ月後！ 12月22日（日）に安部公房『飢餓同盟』読書会を行います。会場は荻窪ベルベットサン。開場16:30、開演17:00、終演20:00。料金¥1500（1D付き）。二次会アリ。詳細・予約はこちらから！ #TAP_MTG
https://www.kokuchpro.com/event/d85189da092b8fc1c0c327498714c14f/



南 慎介 Minami Shinsuke@373shinsuke·Nov 13
戯曲へのエキゾチシズム第4回安部公房「緑色のストッキング」終了しました。全員で読むとまた違う視点が生まれてとても良かった。安部公房研究は果てしないです。次回は1月。海外戯曲です。なににしよう。ご参加の皆様、ありがとうございました。 #戯曲ズム

劇団そばえ（劇研アクターズラボ＋このしたやみ）@gekidan_sobae·Nov 9
【明倫ワークショップ】
安部公房の作品『友達』を創作・上演している劇団そばえが、ワークショップ「安部公房を読む」を行います。場所は京都芸術センター。安部公房を一緒に声に出して読んでみませんか。興味のある方はぜひお越しくださいませ。
ご予約はこちらから！
http://kac.or.jp/27210/



ポストモダン読書会2019@postmodern_lite·Nov 9
安部公房『箱男』のツイキャス読書会を、12月1日(日曜日)に予定しています。われわれのラインナップから唯一の日本作家です！ かなり楽しみです。ポストモダン読書会で敢えて安部公房作品を扱う意義も話していけたらなと思っています。

今月の落とし穴

コルレ尾根@Tori_Corleone·Nov 22

おとし穴

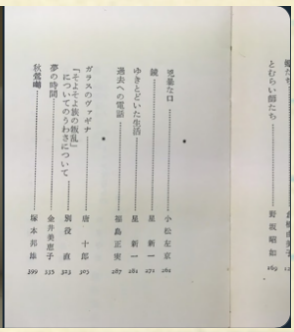
安部公房の文章に「"美しい言葉"なんて気持ち悪い。"正確な言葉"こそ大事だ」という意味のものがあり、個人的に座右の銘になっている。この脚本も計算がゆき届き、隅々まで明晰で曖昧さがない。例によってミステリ趣味の強いホラ話的なプロットで、幽霊の存在が不条理でありユーモラス

今月のなわ

神保町の古書店 @ワンダー@atwonder·Nov 22

早川書房のブラック・ユーモア選集のうち5冊を入荷

日本篇って何が収録されてたっけ？とチェックしてみると、デス・ストランディングの冒頭で引用されている安部公房「なわ」が収録されているのを発見。最近ちょうどプレイしている所だったので縁を感じました。



今月の朗読

劇研アクターズラボ@actorslabo·Nov 10

「安部公房を読む」日本を代表する作家である安部公房の作品を声に出して読んで、イメージを広げてみよう。

▼日時：11月　11日（月）19:00 － 21:00

▼会場：制作室６

▼定員：　20名

▼対象：演劇初心者、安部公房のファン

▼持物：なし

ご予約はこちらから！

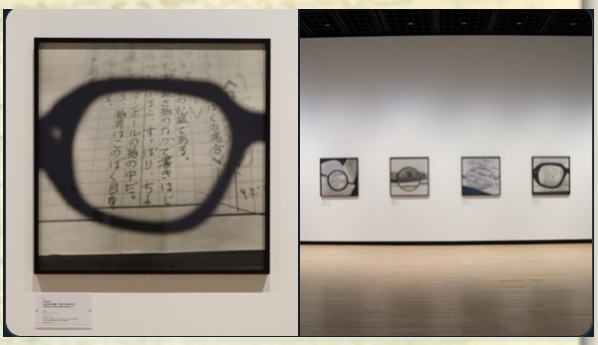
https://kac.or.jp/27210/

（舞台の写真を。椅子二つの舞台）

今月のデススト

Kazuya Kondo Inc.@kazuyakondo·Nov 10
11月8日にリリースされたばかりのPS4ソフト、DEATH STRANDING 通称デススト。
みなさんプレイされていますか. .?
ゲーム内で引用される安部公房の「なわ」が収録されている『無関係な死・時の崖』（新潮文庫）の装幀は近藤一弥によるもの。
この機会に是非読んでみてくださいね♩
#デススト でつながれ

今月の安部公房展



東京都写真美術館@topmuseum·Nov 2
【TOPコレクション　写真の時間】11月4日まで
安部公房の眼鏡を通して原稿を覗き見る様を写した、米田知子の作品。20世紀の著名人の眼鏡を写したこのシリーズは、静止画であるはずの写真の中に「一瞬」にとどまらない複数の時間が重なり合っています。

2019.11.17 SUN 19:00
デジタルツインでの「わたし」とは？『WIRED』編集部が選ぶ、手引きとなる8冊：WIRED BOOK GUIDE TO MIRROR WORLD#3：https://wired.jp/2019/11/17/mirrorworld-bookguide03/
現実世界の〈デジタルツイン〉で構成されるミラーワールドが現実にな るとき、そこに自己同一性を保ったまま、複数の顔（＝アヴァター）を 使い分けながら生きられる可能性が出現する。来たるミラーワールド時 代に、わたしを集約するアイデンティティはどのように変化するのだろ うか――。そのヒントを探して、『WIRED』日本版編集部が選んだ、8冊 の手引きを紹介する。

『燃えつきた地図』
安部公房：著、新潮社
失踪者を追跡することになった興信所員が手がかりを失い、都会のなか で自分を見失ってゆく――。都会に生きる人々の孤独と不安を描いた 1967年刊行の本作は、時代設定こそ高度成長期の日本ではあるものの、
このデジタルな世界におけるアイデンティティの喪失というテーマに通 じるものがある。
どこにでもありそうな団地の日常風景。生活感に̃れる部屋の様子。精 緻な描写から想起させられるのは、活字でコード化された鏡像世界＝ミ ラーワールドだ。
そこで男は自分の世界と他人の世界を行き来し、その境界線をさまよい ながら迷路へと入り込んでいく。巻末で解説文を寄せている日本文学者 のドナルド・キーンは、こうしたさまを「メービウスの曲面のように、 表裏の区別のつかない形になったり、又はネガがポジになるような過程 になったりする」と形容している。

ちなみに生前の安部公房は最新テクノロジーに強い関心をもっており、 いち早くワープロ（まだパソコンが一般的になる前の話である）を導入 して執筆していたことでも知られている。死後に見つかったフロッピー ディスクから遺稿が見つかったというのも、いかにも安部らしいエピソ ードだろう。（TEXT BY DAISUKE TAKIMOTO）

仙川の画材店が48年の歴史に幕 鈴木亜夫さん作品の額装も

仙川駅近くの画材店「motte（モッテ）」（調布市仙川町1）が、12月中旬で48年の歴史に幕を閉じ る。

オーダーメードの額縁を作成する小沢さん

同店は栗田行雄さんと妻の慶子さんが1971（昭和46）年に開業。画材をはじめ、オリジナルの額縁を 販売してきた。店に立つ慶子さん、慶子さんの実弟にあたる小沢基弘さんが高齢となり、閉店を決断し た。額縁はせ て、オーダーメードで作成する。「絵画や版画、ステンド グラス、理髪店のバリカンまで、さまざまなオーダーに応 えてきた」と小沢さん。「開業してすぐに、武者小路実篤さんから色紙の額縁を 依頼された。緊張しながら自宅に納品した」と当時を振り 返る慶子さん。その後も、安部公房夫人で舞台芸術家の安部真知さんがたびたび来店するなど、多くの文化人に親し まれてきた。

［調布経済新聞　2019.11.18］

前号第１０９号の訂正

第二版のダウンロードは：https://docdro.id/JRymwtz

１。P１：表紙：［日本文化をトポロジーで解説する「内なる辺境」シリーズ（５）：包む］

本文に数行の重複があつたので、これを削除した。

２。P３５

「環境保護運動のカルト化の歴史的な過程」図中、Fichte（フィヒテ）も学生の時に神学を専攻したのに、＊を付してゐなかつので、Fichteの名前の右に＊を付して同図を(v2)とした。

これで共産主義の系譜に連なる哲学者と思想家は皆大学で神学を専攻してゐたといふ共通の履歴の持ち主であることが判つた。

３。P２８：

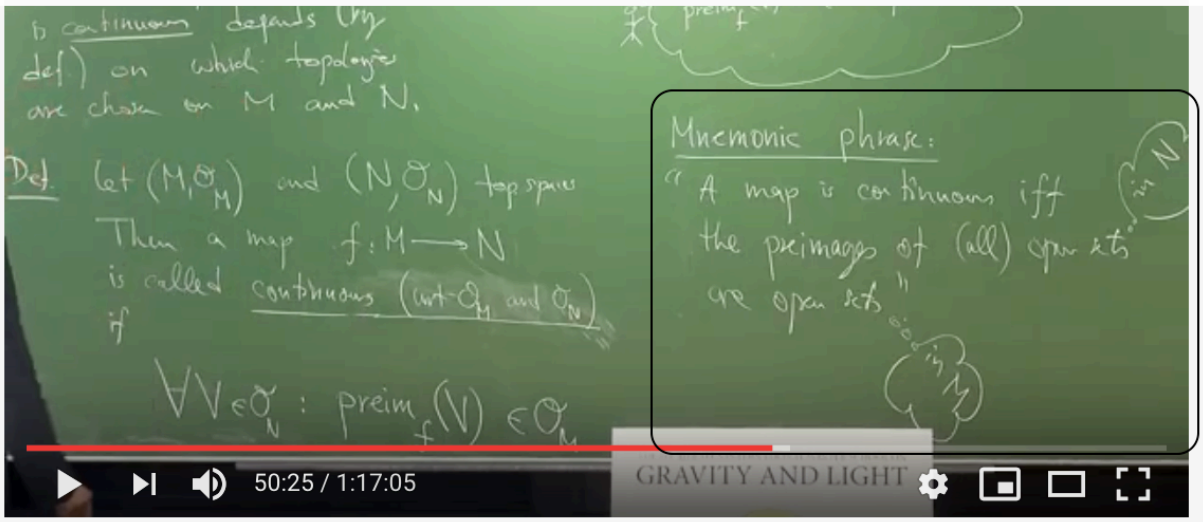
次の-exitを追記した帝国名とする。

（１）インド帝国：Indexit

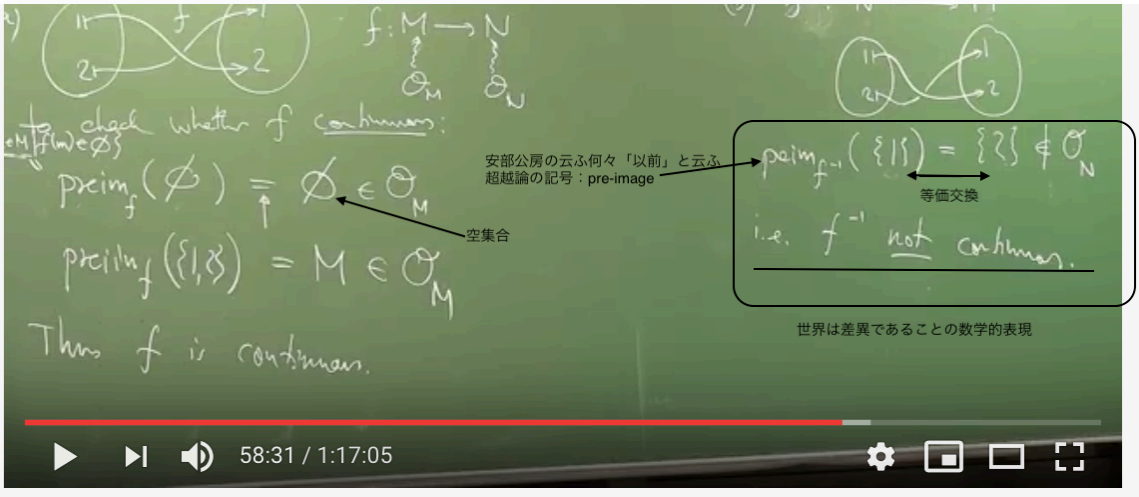
（２）ロシア帝国：Russexit

Topologyは価値論である

この講義の、この板書の、この枠囲いと矢印の箇所が、topologyといふ数学が価値の問題を論じた数学であることが判る：https://www.youtube.com/watch?v=7G4SqIboeig
安部公房の価値論（「新象徴主義」）を理解する為に必要な論理。動画をご覧ください。



Lecture 1: Topology (International Winter School on Gravity and Light 2015)



Lecture 1: Topology (International Winter School on Gravity and Light 2015)

『周辺飛行』論
（２３）
３。『周辺飛行』について（１７）
『写真のぞき――周辺飛行２０』

岩田英哉

前回の続き、即ち、ところが、この「次回から、言葉についての、より実際的な考察を進め」るといひながら、 主題が写真と覗きであると云ふところが、安部公房の安部公房たる由縁なのです。これが、安部公房の言ふところの言葉である。」といふところから始めませう。途中長い註釈が幾つかありますので、本文のみを先に追つて読むのも一法ですが、読み方は自由です。お任せします。

これらの広範に亘る註釈は「周辺飛行」の本文も含めて、安部公房といふ人間を理解するために必要な文章ですし、また逆に言ひますと、安部公房といふ人間の思考範囲の広さと深さを、そして其れが如何に多彩多様な領域にジャンル横断的に及ぶかといふ事を知つて戴き、この作家の世界観、人生観、生き方を知つてもらひたいと思ふからです。

アインシュタインの相対性原理に関する私たち凡人の理解もさうですが、mobile（スマートフォン）が日常生活の中に出現して常時携帯するやうになつて初めて此の天才の発見した原理を身近に知るわけですが、人間の愚かさの常で、身近な物になると忘れてしまふといふ其れほどに天災同様、天才は忘れた頃にやつて来るのだといふ事を憶ひ出してもらひたい。Topologyの言語藝術家安部公房は、あなたが２１世紀を生きるために必要としてゐる作家である。このやうに考へてくれば、２０世紀の１９７０年代に活躍した安部公房スタジオの俳優たちの一人一人がみな、安部公房が手塩にかけて育て、言語を素材に彫琢して育て上げた作品のやうに思ひ出される。

この「周辺飛行」は次の構成になつてゐます。

１。前書き：ニュートラルの意味と言葉の問題
２。戯曲「ガイドブック」の上演を巡つて
（１）写真覗きと云ふゲームによる稽古
（２）田中邦衛の演技
（３）写真覗きの観察と役者の言葉による表現の一致
３。後書き：写真覗きゲームに使つた写真

一つづつ見て行きたい。

１。前書き：ニュートラルの意味と言葉の問題

結論をいへば、「写真のぞき」が何故周辺飛行かといふ理由の説明は、上記「２。戯曲「ガ

イドブック」の上演を巡つて」の「（３）写真覗きの観察と役者の言葉による表現の一致」にある。ここでの安部公房による理由の説明は次の通りです。

「写真のイメージは、それ自体統一的なものであり、それを言葉に置きかえるには、かなり強引な分析力を必要とする。（略）その分析には最初から、ある方法、もしくは方向性が意識されていなければならないのである。そこまで深く観察して、はじめて観察に表現力が与えられる。」

この５０歳を目前にした安部公房の言葉から、私は成城高校生であつた安部公房（あべきみふさ）の次の言葉を思ひ出す。キーワード（鍵になる語）は、方法と方向性である。それは、リルケの『マルテの手記』について書いてある、主人公マルテを巡つて書かれたメモ、断片、または断想といふべき「エッセイ」です。方向といふ文字を見ると、論証は省きますが、安部公房は既に此の時（１９歳）topology（位相幾何学）を知つてゐたと察せられる。即ち、安部公房は『マルテの手記』もまた、リルケの複数の詩集共々、topologyで理解をしたといふこと、即ちリルケの汎神論的存在論の詩をtopologyで理解した事を意味してゐます。方向と関係、外面と内面は空間概念であつて、この方法には時間は存在してゐないといふ事を、十代の少年は、短い言葉で、書いてゐるのです。その方向標識（存在の方向への立札ー例：芥川受賞作『S・カルマ氏の犯罪』の幾つもの挿絵の例を、また処女作『終りし道の標べに』といふ題名をみよ）に従つて歩いて行けば、時間が生まれる中を歩いて生きて行けるかも知れない。標識とはガイドブックのことに他なりません。これが人ならば案内人A、B、C、Dと呼ばれて舞台に登場する。さて、

「　僕はマルテこそ一つの方向だと思っている【A】。マルテが生とどんな関係を持つか等と云ふ事はもう殆ど問題ではないのだ。マルテの手記は外面から内面の為の窪みをえぐり取ろうとする努力の手記なのだ。マルテは形を持たない全体だ。【B】マルテは誰と対立する事も無いだろう。
　例えばヘルデルリーンをマルテと比較する事が出来るであろうか。それは不可能な事に異いない。第一マルテは方法なのだし【C】、ヘルデルリーンは素材なのだ。これを一緒にして考える事等出来るだろうか。」
（全集第１巻『僕は今こうやって』８９ページ下段）

これを方向と方法に分けると次のやうになります。

１。方向
【A】マルテこそ一つの方向である。

２。方法
【B】マルテの手記は外面から内面の為の窪みをえぐり取ろうとする努力の手記なのだ。マルテは形を持たない全体だ。

【C】（ヘルダーリンに対して）第一マルテは方法である。

「１。方向」の【A】は何かといひますと、「２。方法」の【B】とこれは一つになつてゐて、後者【B】の方法は安部公房が自らをもぐらに譬（たと）へた理由であり、この藝術家が世界に対した時に直面する世界を壁だと思ひ、それに穴を掘る、それも往々にして足下に地下に向かつて穴を掘ると云ふ形象が、自己と世界の関係の創造であり、世界の諸事情を全て内面に取り入れ受容して何かまとまりあるものに変換し変形すると云ふ方法であることを語つてゐます。

これでは何か穴を掘るわけですから、其の外部も含めて全体が不明であり（「マルテは形を持たない全体だ。」）、どちらの方向に進んでゐるのかは真っ暗闇でよくわからないわけですし、実際安部公房は夜に生きたと言つて良いのです。この場合、確かなことは、マルテが其の手記の最後の場面で自ら旧約聖書にいふ放蕩息子となつて父親の家、家族と村人の元に帰還するわけですが、故郷と云ふべき場所に回帰して、そこに安住の地を求めるのではなく、いつの間にか姿は同じでも全く別の、血族にも知られぬやうに/な変形し変身し（当時の安部公房の用語で云へば）「転身」した人間になつてしまつてゐると云ふ事、即ち存在になつてゐる事、これが常に変はらぬ、この方法の持つ「【A】マルテこそ一つの方向である」と云ふ決定的な唯一無二のマルテの、そして安部公房の生涯の方向なのです。『マルテの手記』の最後は次のやうに終はつてゐる：

「　思い出された息子はきょうまで忙しさに追われて考えたことがなかった。愛がまだ待っているかも知れないことを。つぎの瞬間に起こったことについては、息子の身ぶりのみが語られていることは不思議ではない。聞いたことも見たこともないような突飛な身ぶりであった。彼はみんなの足もとへ身を投げ出して哀願したのである。愛してくれるなと哀願したのである。かれらは驚きまどいながら彼を抱き起こした。彼をゆるし、彼のはげしい身ぶりをちがう意味に解釈した。かれらが息子の思いつめた明瞭なポーズを見ながらも、その意味を誤解したことは、彼をたとえようもなく安堵させたにちがいない。おそらく家にとどまることができたろう。かれらが彼を喜ばせるにちがいないと信じてひそかに語らい合って示す愛は、彼ではない者に向けられていることが日ごとにはっきりと感じられた。かれらが心を砕くのを見て、彼はほとんど微笑を禁じられなかった。そして、彼は自分がどんなにその愛のとどかないものになったかを知った。
　彼が何者であるかをかれらは知らなかった。彼を愛することは非常に困難になっていた。そして、彼はある一人だけが彼を愛することができるのを感じていた。その一人はまだ彼を愛そうとはしなかった。」
（望月市恵訳『マルテの手記』岩波文庫、２５５ページ）

マルテを理解する難しさは、そのまま安部公房を理解する難しさです。しかし、このエッセイについての詳細は『安部公房文学の毒について〜安部公房の読者のための解毒剤〜』

（もぐら通信第５５号）にて述べましたので、これをご覧下さい。安部公房といふ人間がお解りになる筈です。ダウンロードは」https://www.docdroid.net/4qjfEaF/55.pdf

上記の引用で「一人」とある者とは、安部公房が大好きだつたリルケの詩『秋』［註１］に歌はれるEiner（アイナー）、別様に訳せば一者、即ちGottまたは英語のGodであり、他方リルケの言葉によれば、私のGottはキリスト教のGottではない、どちらかと云ふとアラブのGottに近いと『若き詩人への手紙』の中で若い詩人の質問に対して答へてゐる唯一者です。

［註１］
『中埜肇宛書簡第３信』全集第１巻（７３ページ）に次の言葉がある：

「僕の大好きなリルケの詩、

（以下ドイツ語の原詞を全て引用してゐる。）

このやうに人知られずに変身し「転身」し変形して止まぬ生を送ることだけの持つ方向を確かに生きることが、安部公房の生涯の方法でした。これを『箱男』に関しては、原稿用紙に文字を書く事よりも、其の外にある余白が大事だと言つてゐます。［註２］

［註２］
『安部公房の『密会』の書き捨て原稿の落書』（もぐら通信第６７号）をご覧ください：

「もぐら通信第６３号から第６５号までに各号一つづづ、計３つの落書きを掲載しました。安部公 房が落書きといふものについて、『箱男』の最後に書いてある謂はば安部公房の落書き論を引用 して、この一文を始めます。

「そうだ、忘れないうちに、大事な補足をもう一つだけ。箱を加工するうえで、いちばん重要な ことは、とにかく落書のための余白をじゅうぶんに確保しておくことである。いや、余白はいつ だってじゅうぶんに決まっている。いくら落書にはげんでみたところで、余白を埋めつくしたり 出来っこない。いつも驚くことだが、ある種の落書は余白そのものなのだ。すくなくも自分の 署名に必要な空白だけは、いつまでも残っていてくれる。しかし、それだって君が信じたくなけ れば、信じなくてもいっこうに構わない。」 （『箱男』全集第１巻、１４０ページ下段）

『カンガルーノート』の第１章の最初に、《カンガルー・ノート》といふ「その落書きメモが採 用されてしまったのである。」とあります（全集第２９巻、８３ページ上段）

後期２０年の最初の『箱男』と最後の『カンガルーノート』が同じ落書きであり、余白といふ差 異に書かれた小説であれば、これもまた言はずもがなでありますが、その間の小説は皆さうだ といふことになります。時間的には、あなたが世界の果てに至つた場所で、失われた未来に予め

過去のものとして今日発行される「明日の新聞」と云つても同じです。実際に安部公房は『密会』と『カンガルーノート』は、「明日の新聞」だと云つてゐる（『自作を語る――『カンガ ルー・ノート』』全集第２

９巻、２１１ページ）。この「明日の新聞」を、空間的には落書と安部公房は云つてゐるわけです。いづれも隙間に存在する文字と余白の物語です、即ちリルケの 詩の世界であり、安部公房の詩の世界です。」

それを、此処ではニュートラルと呼んでゐるわけです。安部公房に指導を受けた役者たちは誰も知らなかつたでせうが、安部公房はマルテになれと言つてゐたのです。再度４９歳の安部公房の言葉を：

「写真のイメージは、それ自体統一的なものであり、それを言葉に置きかえるには、かなり強引な分析力を必要とする。（略）その分析には最初から、ある方法、もしくは方向性が意識されていなければならないのである。そこまで深く観察して、はじめて観察に表現力が与えられる。」（傍線引用者）

現実の一部を掘つて写真機の内部に、また即ちファインダーといふ窓を通じて（あるひは通路といつても良い）自分の内面に取り込んで、言葉に置き換へて表現するといふこと。それには「かなり強引な分析力を必要とする。」何故なら、「その分析には最初から、ある方法、もしくは方向性が意識されていなければならない」からです。これはマルテの能力です。「そこまで深く観察して、はじめて観察に表現力が与えられる。」といふことは、マルテの能力とは観察能力だといふことになります。

安部公房は本当にリルケに耽溺しました。耽溺したとは文字に書かれてゐる通りに生きたといふ意味です。『中埜肇宛書簡第５信』（全集第１巻、９２ページ）に次の言葉があります：

「中埜君、
　御変りありませんか。昨日やつと旅行から歸つて参りました。永い旅でした。丁度リルケがロダンから學んだ如く、僕もリルケから「先づ見る事」を學びました。そして旅とはきつとそんなものなのでせう。
　（略）
　君は今、どんな日々を送つていらつしやるでせう。色々な事を想ふにつけて、是非君にリルケの若き詩人への手紙を送りたいと思ひます。けれどそんな御暇がありますか？」

この中埜肇といふ安部公房と親しく哲学談義を交はした友に対するのと同じ事を此のエッセイでニュートラルと言葉の関係を説明するために次のやうに余白は視覚の問題でありますが、沈黙の/と云ふ科白には本質的な間合ひの問題として述べてゐます。これが、安部公房の「先づ見る事」であり、ここでいふ「表現体」となる事なのです）［註３］。

「ニュートラルになった俳優の存在は、しばしば沈黙のままで、じゅうぶんに表現体としての輝きを見えることがある。しかし、その沈黙は、けものの沈黙ではない。言葉と言葉

のあいだに挿入された、語られない言葉、もしくは沈黙という言葉にほかならないのである。
　たとえば、戯曲の行間に指示されている、ほんの一行の短いト書き――

　（間）［註４］

もしその指示が的確なものであり、俳優も的確にその指示を表現しえた場合、その間舞台をひたしている沈黙は、観客の内部に、いかなる饒舌にもまさる対話をひきおこすはずである。これから言葉という場合、そのような深い沈黙までを含めた言葉として了解していただきたい。　　」
（原文は傍線は傍点）

マルテの持つ観察能力を発揮して俳優が「表現体」になるとは、俳優がニュートラルに、即ち存在自体になる事を意味してゐます［註３］。

［註３］
安部公房の名付けた新象徴主義哲学といふ「この哲学とは『詩と詩人（意識と無意識）』に拠つて簡潔に言へば、二項対立の両極端の項を否定して、自己喪失による記憶の喪失を代償に（この否定の中に自分自身の否定を、この否定とは自己喪失と記憶喪失と意識喪失のことにほかなりませんが、このやうな否定を含むといふことです）、果てしない垂直方向（時間の存在しない方向）に次元展開を繰り返した果ての究極に観る（自己の反照としての）第三の客観、即ち存在の創造をするといふ方法論でありました。ここで

（１）観ることと
（２）自分自身が存在になることと
（３）存在自体の出現

これら三つが一つになつてゐます［註A］。ここにも３といふ数字があります。

安部公房の、これが創作の秘密であり、一生を貫く創作のための方法論です。これは、コンピュータの基礎であるブール代数による二進数の論理演算の論理によれば、否定論理積といふ論理に当たります。これが、一生の安部公房の生きる論理であり、安部公房の「現代の実存哲学とは一寸異つた実存哲学」であるのです。

［註A］
（１）観ること
これもリルケに学んだ事です。以下中埜肇宛書簡より引用します：

「中埜君、
御變りありませんか。昨日やつと旅行から歸つて参りました。永い旅でした。丁度リルケがロダンから學んだ如く、僕もリルケから「先ず見る事」を學びました。」（『中埜肇宛書簡第５信』全集第１巻、９２ページ）

安部公房の詩に『観る男』といふ詩がある。（全集第１巻、１３３ページ）ここには、既に「明日の新聞」が「書き了へた」「未来の日記」とし出てくる。

また、汎神論的存在論の形象（イメージ）が、後年の海や洪水などに通ずるものとして、次のやうに歌はれてゐる。

「此の果てしない存在にとりかこまれて、あふれ出た透明な涙を両手に受けるのは…… ？唯一未来の日記を書き了へた時に……。」

此の詩には、これ以外にも、転身、沈黙、「僕の中の「僕」」の話法、出発、忘却といふ、安部公房文学にとつて本質的な用語が書かれてゐる。

（2）自分自身が存在になること
「詩人、若しくは作家として生きる事は、やはり僕には宿命的なものです。ペンを捨てて生きるという事は、恐らく僕を無意味な狂人に了らせはしまいかと思います。勿論、僕自身としては、どんな生き方をしても、完全な存在自体――愚かな表現ですけれど――であればよいのですが、唯その為に、僕としては、仕事として制作と言ふ事が必要なのです。これが僕の仕事であり、労働です。」
（『中埜肇宛書簡第８信』（1946年12月23日付）、全集第１巻 １８８ページ下段）」

（3）存在自体の出現
『詩と詩人（意識と無意識）』より引用します。ここでいふ第三の客観こそが、安部公房のすべての主人公の最後に観る究極の存在のことなのです：

「　諸々の声は吾等の魂が夜の本質にふれた所から始まる。それが様々な次元に展開されて言葉となる。それは自己否定＝自己超越の形を以て意識の中に捉えられる。物それ自体、云い代えれば夜の直覚が展開する自体として或種の象徴的予感を産みつける。その中にこそ実存的意義を失わない、客観なる言葉を生み出した本源的な内面的統一に反しない、第三の客観が覗視されるのではないだろうか。
　如何なる表現も主観を通してのみなされ得ると云う事は明かである。主観的体験のみがあらゆる意識を言葉たらしめるのである。そして当然、生存者としての人間各個の内面的展開次元の相異に従って、その言葉の重さ（含まれている次元数）の相異が考えられる。主観はその魂の夜の本質にふれる程度によって様々な重さを持つ。
　では此の主観のつもり行く次元展開の究極は、一体何を意味するのであろうか。その時人間の魂は限りない夜への切迫を体験するのである。夜の直覚は単なる概念ではなくなり、行為・体験・方法の中に現実的な姿を表すのである。そして、此の永遠の距離を以てはるかへだたっている究極を、吾等は第三の客観として定義する事は出来ぬものであろうか。」
（全集第１巻、１０７ページ）」

［註４］
「この安部公房のニュートラル演技論の「（間）」について既論より引用して、ニュートラル概念の理解を深めたい。『安部公房の初期作品に頻出する「転身」といふ語について』（もぐら通信第５６号）より引用します：

「本題からは逸脱しますが、上記の［リルケのエッセイの］「（６）『室内インテリア』」の最終章XXIは、安部公房 の「空白の論理」によるいつもの構成と同じ構成になつてゐて、これは、安部公房が此の作 品を読んだかどうかは別にしてさへも、安部公房が相当広範囲にわたつて、安部公房全集に 採録されて読者の知ることのできる作品の数以上にリルケの作品を渉猟してゐたことを示してゐます。あるいはさうでないとしたら、または、さうでないとしても、数少ないリルケの 「空白の論理」の余白と沈黙の表現に接して、安部公房はリルケの此の「空白の論理」を本 当に深く理解をした。即ち、この作品の最終章XXIに、『詩と詩人（意識と無意識）』にあるのと同じ「空白の論理」に従つた章があるのです。

リルケの「（6）『室内インテリア』」の最終章：

「XX Wenn meine Mädchen wandern und sich bewegen, schwanken ihre Seelen langsam wie Kähne, die an ein unruhiges Ufer gebunden sind.— Denn ihre Seelen sind Gondeln von Gold und voller Ungeduld. （略）Und sie heben die Furcht vor diesen vielen Dingen in das seidene Dunkel ihres Lebens hinein und falten die Hände
davor. So sind ihre Gebete..

XXI..... ....」

［拙訳］「第XX章 私の処女（をとめ）たちが逍遥し、あちらこちらへ動く場合にはいつも、その 魂はゆつくりと、不安で定まらぬ岸辺に係留される筏のやうに上下に揺れる。ーといふのは、 乙女たちの魂は、黄金のゴンドラなのであり、だから我慢できないといふ性急な思ひで一杯 のゴンドラなのだから。（略）そして、私の乙女たちは、これらの数多くの物に恐れを抱き、 その恐れを、乙女たちが自分たちの命の、絹の暗黒の中へと持ち上げて入れ、両手を其の物 たちの前で重ねて折畳む。と、私の乙女たちの祈りは..

第XXI
章..... ....」

『詩と詩人（意識と無意識）』の中の第１部第１章「四、人間の在り方」の半ばに置かれた 次の余白と沈黙をご覧ください。：

「総てをかくあらしめるもの、それが夜である。此の吾等の判断も、表現も、生も、行為も、 幻想も、総て其れがある如くあらしめるもの、それが夜なのである。解釈学的体験、— 次 の数行の余白はその無言の言葉で埋められるのだ。（私は君達の自己体験をねがう為に此の 余白を用意したの
だ） .....

.... そして人間の在り方は正に此の数行の余白によつて明確に示されるのだ。夜はかくあらしめ るものであった。」

（全集第１巻、１１２ページ下段）

また、中埜肇宛て書簡第２信にも、この沈黙の「……」がある。作品を書く場合のみならず、 日常の親しくゐるものたちにも、手紙の中で此の空白と沈黙を文字の間に挟んでゐる。此の 「……」をテキスト（文字）の間に挟むと、この「……」の両側の文字の間に隙間、即ち差 異の生まれる効果があり、また逆に、この空白と沈黙といふ差異の間にテキスト（文字）が あるといふ、関係が反転して、一種メビウスの環になるといふ効果がある。安部公房好みの 体裁に、文章がなるわけです。

「どうか君の現実に対する無理解をとがめないで下さい。 ……

…… 人々は魂を求め合つて居ます。僕流に云へば、人々は、自分自身に云ひきかせたがつて居 ます。……愛。 ……

…… 僕はもつとよく君を知りたかつた。（略）一人は僕の知つて居る人で、も一人は見知らぬ 人です。 ……

…… 君の云ふ愛について、どうか、何から何迄、具体的に知らせて下さい。絶対にかくさない で。僕には思ひあたる様な所があるのです。それとも僕にはそれを聞く丈の値打が無いでせ うか。 ……

…… 僕はあの会を創め、今それから遠ざかつて見て、如何に生命を持つた人間が少いかを、つ くづく知りました。（略）」（全集第１巻、７０－７１ページにある）

かうして見ると、安部公房の余白と沈黙の表し方は、上に引いた例のやうに、

（１）点線といふ記号によつて余白と沈黙を示すか、また、 （２）『名もなき夜のために』の最後のやうに（ ）といふ記号によつて存在を示し、その 中に文字を書いて、これを話者や登場人物の語る、存在の中にある存在の文字とするか（例 へば、最初の小説の題名の『（霊媒の話より）題未定』や、最後の小説『カンガルー・ノー ト』の最後の呪文「（オタスケ オタスケ オタスケヨ オネガイダカラ タスケテ ヨ）」、あるいは、 （３）『詩と詩人（意識と無意識）』の最後に第二部の印を漢用数字で示して、そのあとを 空白にして置くか、

この三通りがあることになります。

『名もなき夜のために』に次の箇所があります。：

「特にマルテの手記が二部に分かれていることを忘れてはならぬ。一部から二部へ移っていくものの意味は、夜を支点として人間が如何に転身するかの記録でなければならぬだろう。 更にその総ての意味が僕自身の夜でなければならぬ。夜が如何にして一切を奪って行った か……それからそれをどんな仕方でもと通り、いや場合によっては一そう満ち足りたものと して返えしてくれたか……しかもその後、仕事をし了えて放心したリルケの呟きの中で、もう書き得ないものとして待っていた無言の第三部、その空白を流れる限りない日常の悲しみや悦びをふと想い浮べることがあったら、僕たちも転身の意味を本当に悟ることが出来るかもしれない。その空白が既にオルフォイスのソネットやドイノの悲歌を生む約束になっていたなどと考えることで、それを単なる変化や移行にしてしまうのは容易だが一そう恐ろしい ことではなかろうか。僕たちに残された一番確実な遺産は、決してリルケの神のような死でもなく、飛翔にも似た転身でもなく、実にあの侘しい空白であったということ……それから後何んな鎖があると云うのだろう。（略）」（全集第１巻、５１９ページ上段）（傍線筆者）

『マルテの手記』が文字で、これは第一部、ここからは第二部と明示されてゐる訳ではあり ません。安部公房が第一部第二部と呼んだ前後は、形式上または体裁上は、「アペローネ、 僕は君もここにいるように考える。君にはそれがわかるかね、アペローネ？君にはそれがわ かるにちがいないと僕は考える。」と終わる箇所が第一部の終わり、そして、余白を残して 新たにページを立てて、「今では、女と一角獣の壁掛けはブサックの古城にはない。」で始まるのが第二部といふことになります。

今私の手元にあるドイツ語のインゼル版のペーパーバックスの『マルテの手記』はさうなつ てをり、岩波文庫で出てゐる望月市恵訳でも、ページを改めての、更に最初に数行の余白を 置いての、第二部を始めてゐます。当然のことながらドイツ文学の専門家である訳者は、こ のリルケの意図を十分に知つてゐた。

上の引用で「一部から二部へ移っていくものの意味は、夜を支点として人間が如何に転身す るかの記録でなければならぬだろう。」とありますから、安部公房の夜は此の第一部と第二 部の間の余白に存在するので

す。そこには夜があり、他の両側の二つの部立てに対しては、 その夜は支点である。二つの部門は、この余白、空白、沈黙があつて初めて均衡を全体とし て保つて表に、さういふ意味では昼間に、成り立つといふのが、安部公房の論理であり、思想です。しかし、これはまたリルケの論理であり、思想です。

そして、引用中の二つ目の「……」といふ文中の余白の後にいふ、「しかもその後、仕事をし了えて放心したリルケの呟きの中で、もう書き得ないものとして待っていた無言の第三部、 その空白を流れる限りない日常の悲しみや悦び」とある此の第三部は、もともと本来の『マ ルテの手記』にはない部門です。これは『詩と詩人（意識と無意識）』に繰り返し論ぜられ た、哲学談義を親しく交わした友中埜肇と議論したあの論理、即ちAでもなくZでもない、 即ち両極端を排して、第三の客観または第三の道を求める論理なのです。右でもなく左でも なく、上でもなく下でもなく、生でもなく死でもない、第三の客観、即ち（詩人が自己を捨 て、自己喪失をし、自己の記憶を忘却して次元転換を果てしなく続けて至る、自己の最高度の、極限の反照としてある）存在、です。［註９］

［註９］ この、安部公房独自の論理については、『詩と詩人（意識と無意識）』（全集第１巻、１０４ページ）をお読 み下さい。

このやうに、安部公房十代からの此の論理の上に、安部公房は新たに『マルテの手記』の解釈を加へて、詩人から小説家になる為に、『マルテの手記』を自分自身のものとする為に、 あるいは『マルテの手記』を超越するために、「空白の論理」の中に第一部でもなく第二部でもない第三部、即ち第三の客観、即ち存在を仮構して、この作品をまとめたのです。

第一部でもなく第二部でもない、第三部。それが、最後に安部公房が『名もなき夜のために』 の付け加へた存在を示す（ ）の中に敢へて書いたテキスト（文字）なのです。

「（此処に空白がある。空白の告白がある。これが恐怖なのだろうか。僕は欺瞞が苦しかっ た。まだとどまっていると思わせる駆け引きいやだった。僕ら人間を物への供物としよう。 名もなき夜に生きて昼を織り出すものとなろう。 ある日…….）」（全集第１巻、５５８ページ下段）

ここまで考へてみれば、この最後の、（ ）で象徴される存在の中の文字を読むと、安部公房が何を考へてゐるかは、よくわかります。「ある日」もまた空白と沈黙の中にある。「ある日」の物語もまた空白と沈黙の中にある。何故なら其れは特定の日ではなく、「ある日」 だからです。

そして、「転身」は、この（ ）の中や「……」や（文字通りの物質的な）余白の中、即ち 夜の支点の余白と沈黙の中で、人知れず、誰とも名前を言はれずに、おこなはれるのです。 安部公房の意識と無意識の入籠構造であり、螺旋構造です。

そして、このやうな（ ）と「……」と（文字通りの物質的な）余白の使ひ方は、このまま、 領域を問はぬ、安部公房の作品の入籠構造または螺旋構造をなす話中話、劇中劇の構造にな つてゐます。」
（『安部公房の初期作品に頻出する「転身」といふ語について』（もぐら通信第５６号））

「このやうな（ ）と「……」と（文字通りの物質的な）余白の使ひ方は、このまま、領域を問はぬ、安部公房の作品の入籠構造または螺旋構造をなす話中話、劇中劇の構造になつてゐ」るのは、この言葉の通り其のまま安部公房スタジオのために作家の書いた戯曲の構造になつてゐます。演技論が其のまま戯曲構造である。これば、戯曲に限らぬ、安部公房の世界の作品なのです。何故、さうなのかと云へば、安部公房の意志は、成城高校生であつた十代の時代から、世界と作品の構造を言語の構造其のものと一致させて一つのもの

一体のもの、即ち言語表現を存在となすことにあるからです。このことについては次の論考に詳述しましたので、ご覧ください。

（１）『安部公房の初期作品に頻出する「転身」といふ語について（１）から（４）』（もぐら通信第５６号から第５９号）：
(a)第５６号：https://docdro.id/SheWeQu
(b)第５７号：https://docdro.id/Ep6tfMh
(c)第５８号：https://docdro.id/sXNnTZh
(d)第５９号：https://docdro.id/3LMqUO5
（２）『デンドロカカリヤ論（前篇）』（もぐら通信第５２号）：https://docdro.id/1a3J4RE
（３）『安部公房文学の毒について』（もぐら通信第５５号）：https://www.docdroid.net/4qjfEaF/55.pdf#page=2

ここまで来ますと、安部公房スタジオの活動の後半がさうであり、最後の『仔象は死んだ』では、余白と沈黙の言葉で舞台を創造するといふ事になりましたから、いよいよ台本は無用となるに至つた。

２。戯曲「ガイドブック」の上演を巡つて

安部公房がここで「以前に「ガイドブック」という劇を上演したときの経験から始めてみよう」といふ上演は、

「昭和四十六年（一九七一）四十七歳
（略）
十一月、『ガイドブック』を第三回紀伊国屋公演として、プロデュース・システムで自ら演出、上演（紀伊国屋ホール、四〜二十三日）。」
（『安部公房の劇場　七年の歩み』（編集安部公房スタジオ、発売創林社。一九七九年七月二五日発行）の「安部公房演劇年譜」８１ページ。）

とある上演のことです。

安部公房曰く、この戯曲の名前は戯曲の名前ではあるが、これは此の時採用した「「稽古の方法」をそのまま使ったのだ」。これは一体如何なる方法かといふと「俳優にそれぞれ、状況を指示したガイドブックを手渡し、その指示に従って自由にアドリブをしながら、相手との関係を経験的に探り出してもらうという方法」です。

その目的は、この関係を即興的に創造すると「二人の関係は鋭くとぎすまされ」て、「その緊張から、俳優たちはいやでもニュートラルにならざるを得ない肉体的にニュートラルになるばかりでなく、言葉の領域でも、主観的な気持ち芝居は剥げ落ちてしまう」からで

す。「主観的な気持ち芝居」とは、これまで「周辺飛行」で安部公房の述べて来た新劇式の大仰な形芝居のことです。この目的のために安部公房が発案した稽古の方法が「「写真のぞき」と名付けたゲーム」です。

（１）写真覗きと云ふゲームによる稽古

奇妙な、役者を訓練するといふにはどの劇団もしない訓練であらうと思はれる。

「「写真のぞき」と名付けたゲームも、ガイドブックの一つの例だった」といふガイドブックといふ訓練は、超越論を体感し（生理感覚）、体得する（「生理に刻み込んでしまわなければならない」）ための訓練です。即ち、何か量子力学者が暗箱（ブラックボックス）の中にゐる猫を観るために窓の蓋を開けて窓を通じて見るとズレるといふこと、実は見た像は像自体なのではなく、像のズレである事、即ち、世界は差異であるので（これは安部公房の超越論に依る世界観である）、見たときには既に時遅しといふわけで、常に私たちの眼にするのは遅延であるといふ事を言葉で表現する訓練なのです。

この俳優の経験は「伝達しなければならない必然性」を発見するといふ経験であり、この必然性の発見が「伝達という行為の発見」である事を俳優に気付かせることが、安部公房の眼目である。この時、安部公房は「俳優の内部の言葉の力がためされる」といふのです。即ち、俳優の内部の言葉とは、安部公房固有の話法「僕の中の「僕」」、「私の中の「私」」の後者の語る沈黙の言葉のことです［註５］。

［註５］
この安部公房固有の話法については「『デンドロカカリヤ』論（後篇）」（もぐら通信第５４号）にて詳述しましたので、ご覧下さい。

（２）田中邦衛の演技

「しかし、このゲームでは、ぼく自身が大きな発見をさせられることになった。ぼくを驚かせたのは、田中邦衛君である。彼に関するかぎり、このゲームは、ほとんど必要のない訓練だった」といふ田中邦衛の演技とはどのやうな演技であつたか。

安部公房は「平凡な街頭風景のスナップ写真」を田中邦衛に示して、言葉で表現させたところ、この役者の言葉の質は「まるでロブグリエを思わせる、硬質で正確な描写だった。ほとんど主観的な印象をまじえずに、あれほど対象に即物的な迫り方を出来るのは、かなり方法を自覚した経験ある作家にでも容易ではない」程の言葉の質の高さであつた。これは、このまま安部公房の目指した小説と戯曲の言葉の質の高さであると、私たち読者は理解して差し支へない。安部公房は文体（スタイル）即ち言葉に依る様式（スタイル）の話をしてゐるのです。役者の言葉に様式（スタイル）を求めてゐるのだ。この一点で、三島由紀夫と安部公房の演劇観、演劇論、演技論は一致してゐる。これが「周辺飛行１９」

（もぐら通信第１０９号）で、安部公房が三島由紀夫との交遊を回顧して「ぼくらは［俳優に対する］その絶望を酒の肴にして、大いにたのしみ、そのうち彼は演劇そのものに絶望してしまったようだ」と言ふ対話の主題だつたのです（全集第２４巻、１７６ページ上段）。

名作『砂の女』（１９６２年）の冒頭は、この言葉通りの文体・様式（style）になつてゐる：

「八月のある日、男が一人、行方不明になった。休暇を利用して、汽車で半日ばかりの海岸に出掛けたきり、消息をたってしまったのだ。捜索願も、新聞広告も、すべて無駄におわった。」
（全集第１６巻、１１７ページ）

これも傑作『他人の顔』の冒頭の同じ三行は次のやうなものである：

「はるかな迷路のひだを通り抜けて、とうとうおまえがやって来た。「彼」から受け取った地図をたよりに、やっとこの隠れ家にたどりついた。たぶん、いくらか酔ったような足取りで、オルガンのペダルのような音をたてながら、階段を上りきった、とっつきの部屋。」
（全集第１８巻、３２２ページ上段）

同様にいふも愚かなる傑作『燃えつきた地図』から：

「クラッチを踏んで、ギヤを低速に入れかえる。二十馬力の軽自動車には、この勾配は、いささか負担が大きすぎた。
　道の表面は、アスファルトではなく、目の荒いコンクリートで固められ、スリップ防止の目的だろう。」
（全集第２１巻、１１６ページ上段）

安部公房による田中邦衛といふ役者に対する評価は非常に高い。何故なら、田中邦衛は「演技をこえて、一つの表現体になり切ってしまっているからだ。」そして「彼の驚くべき観察力は、一見して計算をともなわない直観的表現と見えたものが、じつは的確な演技だった」からである。存在とはいはぬが、表現体と云へば、役者が存在になることの当の存在でありますから、人を褒めない辛辣なる安部公房にしては、これは最高の讃辞といふべきです。

田中邦衛が此の能力を発揮したのは「平凡な街頭風景のスナップ写真」でした。これはこのまま安部公房の写真であり、この稽古に使用したのは安部公房自身の撮影した写真だつ

たのでせう。安部公房の写真は、十代に書いた詩群がさうであるやうに、みなスナップ写真です。即ち、幾ら沢山の写真があつても、それらを文脈即ち視点によつて組み替へて一つのまとまつた物語を幾つでも生み出すことのできるスナップ写真の集合が、安部公房の一枚一枚のスナップ写真の意義であり意味である。これは、安部公房の十代の詩の一編の構成の仕方と同じ論理です。即ち、詩の構成部分である連または聯同士を入れ替へ組み替へることのできる、時間を捨象した超越論の構造を備へた詩を安部公房は書いたといふことは諸論にて既述既論の通りです。あるひは、安部公房スタジオの設立同時に出版した『箱男』（１９７３年）の構造が此れだと云へば、読者には説明無用で、お判りでせう。

「写真のぞき」は、かうして考へて来れば、確かに安部公房の小説と同じです。安部公房にとつて奉天以来窓がどんなに重要な形象であるかは『もぐら感覚５：窓』（もぐら通信第３号）以来繰り返し述べて来たことです。第３号のダウンロードは：https://docdro.id/k4C2wcJ

また、奉天の子供時代の安部公房が二階の自分の部屋に出入りするのに、玄関を使はずに、友人と窓から出入りをすることがよくあつたといふ事実の持つ、安部公房文学に於ける意味については『安部公房の奉天の窓の暗号を解読する〜安部公房の数学的能力について〜』（もぐら通信第３２号および第３３号）をご覧下さい。ダウンロードは：
（a）第３２号（前篇）：https://docdro.id/eRXOrsm
（b）第３３号（後篇）：https://docdro.id/Z6k33DL

（３）写真覗きの観察と役者の言葉による表現の一致

田中邦衛のお蔭で、それまで安部公房自身にとつても小説と詩の世界でしか現実的な実現は無理であらうと思つてゐた理想論としての「観察と表現の一致」が実際に俳優の上でも実現できる事を目の当たりにした事によつて、安部公房は消極的理想論を捨て、積極的理想論にニュートラルといふ演技理論を切り替へたといふことが、この「周辺飛行」に書かれてゐる、田中邦衛といふ役者の果たした重要な役割だといふことが判ります。

「むろん観察と表現の一致は、なにも俳優のための方法に限ったものではない。小説の場合にも、まったく同じ関係が成り立つ。「ガイドブック」の場合、ぼくは原稿用紙にペンで書くかわりに、「写真のぞき」のゲームを軸にして、俳優で舞台に書（描）いたような気がしている。写真が観察しているあいだ、ぼくは俳優の観察を観察していたのだ。この観察と表現の関係は、たぶん表現芸術一般にあてはまる法則なのではあるまいか。」

無機物の場合には「ガイドブック」や立札や電柱の広告や十字路に立つバス停であるが、有機物の場合には「とらぬ狸」や「案内人」と呼ばれてゐて、無機物有機物が同一平面に置かれてゐて意思疎通のすることは、読者に於かれては初期安部公房以来お馴染みのことです。歴代の作品にどんな案内人が冒頭に出て来るか再掲します。

「さて、前期２０年の案内人は、次の通りです。
（１）手記（実は存在しない）：『終りし道の標べに』

（２）名刺（失われた名前の書いてある）：『S・カルマ氏の犯罪』

（３）とらぬ狸（存在しない）：『バベルの塔の狸』
（４）ニワハンミョウ（一度取り逃がして失った）：『砂の女』
（５）損傷した顔（失われた）：『他人の顔』
（６）依頼人の夫（失踪した）：『燃えつきた地図』

後期２０年の案内人は、次のようになるでしょう。

（１）箱男（失踪した男）の書いた箱の製法のマニュアル：『箱男』
（２）救急車に誘拐された妻（失踪した女）：『密会』
（３）ユープケッチャ（無時間ー永遠ーに棲息する＝存在しない）：『方舟さくら丸』
（４）カイワレ大根（脚に生える＝存在しない）：『カンガルー・ノート』

これらの案内人をみると、みな予（あらかじ）め失われたものと一言でいうことができることに気づきます。

この「予め失われたもの」は、空間の中では上記の名前で、予め失われたものとして登場しますが、時間の中では、予め失われた未来として「明日の新聞」と（最後に登場してそう）呼ばれ（戯曲『友達』、『密会』その他）、『第四間氷期』では、予言機械の予言となり、その予言は物語の最後に目に見えない暗殺者の足音と化してやって来て登場し、『砂の女』や『箱男』や『カンガルー・ノート』の最後に失踪や死亡を告げる一枚の紙として登場するのです。そうして、勿論これらの紙の媒体は、次の次元への案内人又は案内書として、その上位接続点（積算値、即ち奉天の窓）、即ち十字路の交差点に立つ方向標識板なのです。」
（『安部公房の奉天の窓の暗号を解読する～安部公房の数学的能力について～（後篇）』（もぐら通信第３３号）の「９。安部公房の案内人」）

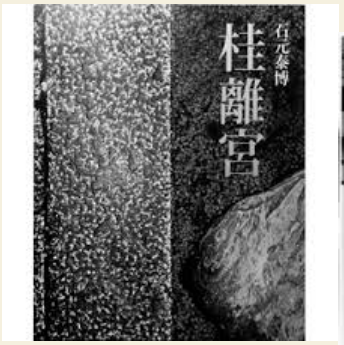
これらは皆、存在の方向への案内人であり、このやうなニュートラルな存在たる案内人を配することが、安部公房の小説であり戯曲であり、後者の現実である安部公房スタジオの舞台であつた。

３。後書き：写真覗きゲームに使つた写真

安部公房スタジオの俳優たちに見せた「写真のぞき」ゲームのための写真は、スナップ写真といふ写真の性格から云つて、安部公房自身の撮影した写真と述べましたが、此の最後の章で、それ以外には石元泰博といふ写真家の名前を挙げてゐます。

「そして、後になって気付いたことだが、ゲームの内容をふくらませ、イメージの展開に緊張を与えた写真のなかで、期せずして石元泰博氏の作品が目立った事を付け加えておこう。それはおそらく、石元氏の作品自体が、的確な観察に支えられた表現だった殻に違いない。」

この文章から読めることは、多分安部公房は複数人の写真家の写真を（自分も含めて）使用しただらうといふことです。これは写真家としての安部公房がファインダーといふ窓を通じて世界を見る時の姿勢の正しさを確認するための稽古でもあつたといふことを意味してゐます。石元泰博といふ写真家の写真です。何故か黒澤明といふ映画監督の画面構成上の様式美に通つてゐる。



リルケの『オルフェウスへのソネット』を読む
（５３）
第２部 XXVIII
～安部公房をより深く理解するために～

岩田英哉

XXVIII

O KOMM und geh. Du, fast noch Kind, ergänze
für einen Augenblick die Tanzfigur
zum reinen Sternbild einer jener Tänze,
darin wir die dumpf ordnende Natur

vergänglich übertreffen. Denn sie regte
sich völlig hörend nur, da Orpheus sang.
Du warst noch die von damals her Bewegte
und leicht befremdet, wenn ein Baum sich lang

besann, mit dir nach dem Gehör zu gehn.
Du wußtest noch die Stelle, wo die Leier
sich tönend hob —; die unerhörte Mitte.

Für sie versuchtest du die schönen Schritte
und hofftest, einmal zu der heilen Feier
des Freundes Gang und Antlitz hinzudrehn.

【散文訳】

ああ、来い、そして去れ。お前、ほとんど子供であるお前よ、
一瞬、踊りの姿を補って、それを、あの踊りという踊りのうちのひとつの
純粋な星座となせ、その中で、わたしたちは、鈍く、重苦しく秩序立てる自然を、

過ぎ行きながら、超えるのだ。何故ならば、自然は、オルフェウスが
歌ったならば、全く耳傾けながら、活発に、盛んになるばかりなのであったから。
お前は、まだ、その当時から感動して、動かされた者であったし、
そして、一本の樹木が、

お前と一緒に聴覚の方へ行こうと、長い間思っていたときにはいつでも、
一寸違っていた、奇異に思われた。お前は、竪琴が音高く鳴り響いていた場所を、まだ覚えていた。—　聞きとることのできない真ん中を。

この真ん中のために、お前は、美しい足どり、美しい歩調を試みたし、
そして、男の友人、即ちオルフェウスの健康な祝祭のために、一度は、
歩行と顔（かんばせ）を、そちらへと向けることを願ったのだ。

【解釈と鑑賞】

リルケの自註によれば、このソネットは、Wera、亡くなった友人の娘に宛てられている。

第1連冒頭の「来い、そして去れ」とは、オルフェウスに倣って、留まることなく、変身を続けよというこころだ。（この命令形は、次の、最後のソネットXXIXの第2連の「変身の内と外を出入りせよ」という命令形にまで響いている。）第2部ソネットXVIIIでは踊り子を歌っていたが、踊ることの究極の姿は、一本の樹木のように垂直に立つことなのであった。そのような本質的な踊りのできるお前ならば、「踊りの姿」に力を貸して、その姿を踊りの星座にすることができると歌っている。

この「踊りの姿」の姿については、既に何度か述べてきたところです。第1部ソネットXIでは、騎士の星座が歌われていました。また、その次の同じ部のソネットXIIでも、精神との関係でFigur、フィグーア、姿を歌っています。それから、第2部ソネットXIIで歌われている、生命が蘇生をするときの姿、いや姿が、schwingen、シュヴィンゲンする、躍動することによって、精神が創造する宇宙が歌われていた。さて、これらの姿は、何故そのように歌われているのでしょうか。姿とは何でしょうか。

それは、騎士の星座であれ、この踊りの星座であれ、星座というものは、精神が点と線を結んでできる、時間によって変化しないentity、実在、存在であることを、ここでも言っているからです。この星座というentity、実在、存在をいうときには、リルケはまた同時に空間を思っているのです。それは、第2部ソネットXIIで、やはり精神が星座を認識する能力によって、そうしてそう認識することと関係して、「認識すること」がそうであったように、他のソネットでも、何々することとリルケが書いたときには、それは、空間を意味しているのでした。Entityは、精神が認識し、認識された対象、空間です。従い、このソネットの第3連でも、場所、即ち空間が歌われています。

しかも、この第1連第3行の踊りの星座は、「純粋な星座」と歌われているので、既に今まで述べてきたように、rein、ライン、純粋なという言葉をリルケが使うときには、時間を捨象しているという意味ですから、この星座は時間と無縁の空間、entity、存在を意味しています。そうして、これらの言葉の使い方は、その概念から言っても、その組合せから言っても、正しいのです。リルケは言葉の人であり、詩人であります。一語も狂うことがありません。

さて、第1連第1行の「ほとんど子供である者」、そのような子供とは一体なにを行っているのでしょうか。わたしたちは、第1部ソネットIIで同じ表現をみています。それは、

UND fast ein Mädchen wars und ging hervor
aus diesem einigen Glück von Sang und Leier
und glänzte klar durch ihre Frühlingsschleier
und machte sich ein Bett in meinem Ohr.

【散文訳】

そして、それは、ほとんど娘である者であった、そして、
歌と竪琴のこの幾つかの幸福の中から姿をあらわして、
歌と竪琴の春のヴェールを通じて、清澄に輝いたし、
そして、自らのために、わたしの耳の中で、寝床をしつらえた。

この娘は、世界中を眠らせ、世界を眠っているのであるが、そのような、死を超えて目覚めることのない娘だ。この娘は、何なのだろうか。

最初に読んだときには、はっきりとはわからなかったが、ソネットもここまで読むと、リルケが「ほとんど」であるといっている子供や娘、そのような人間がどのような人間かは、はっきりとしている。

「ほとんど子供」とは、いってしまえば「子供であって子供でない者」という意味である。第1部ソネットIIの「ほとんど娘」である娘は、娘であって娘ではない者である。それは、大人であって子供のこころを失わない、大人であって乙女のこころを失わない人間のことをいっているのだ。そのような大人であるとは、このソネット全篇を通じてリルケが歌っているように、空間、もの、人間、宇宙、変身、態度、こころ、孤独、死と生、循環、二重性、自由、意識と無意識等々とその規則、即ち法則を知悉し、慣れ親しんで我がものとしている人間、ひとことで言えば、純粋な空間を願い、知っている人間のことです。

さて、そのような純粋な星座、純粋な空間の中で、わたしたち「過ぎ行きながら」生きている人間は、自然を超えることができると歌っています。自然は、鈍重に、重苦しく秩序立てますが、これはオルフェウスが秩序立てるのとは違って対比的に考えることができると思います。オルフェウスが、絶対絶命の場所から叫び声をあげつづけるわたしたち人間に対して、どのようにその叫びを秩序立ててくれるのかは、既に第2部XXVIでみた通りです。

確かに、純粋な星座、即ち純粋な空間の中では、わたしたちは、過ぎ行くものといえども、そのまま、自然を超越することができるでしょう。それは、ここまでの第1連の解釈でも予感され、理解されることです。

そして、なぜ、それができるのかを歌ったのが、第２連です。なぜならば、オルフェウスが歌うと、それだけで、その場合のみ、自然はそれをすべて聞きながら、盛んになったからです。「鈍く、重苦しく秩序立てる自然」が、そうではなくなったと言っている。これは、何を言っているのでしょうか。それは、第2部ソネットXIIIで、

Zu dem gebrauchten sowohl, wie zum dumpfen und stummen
Vorrat der vollen Natur, den unsäglichen Summen,
zähle dich jubelnd hinzu und vernichte die Zahl.

【散文訳】

一杯の自然の、使用されたまた鈍く黙した貯蔵に、即ち言葉で言い表すことのできぬ合計に、お前自身を歓喜を以って付け加えて勘定し、そして数を破壊しなさい。

と歌っているように、数を破壊して、自然の貯蔵された富の中へと自らを加えることができるということを言っているのだと思います。そうすることによって、過ぎ行く者、影であるわたしたちは、存在の一部となることができる。そこでみた空間には、宇宙の中心が現れる。これが、どのような経験であり、どのような場所であるかは、リルケは悲歌５番において歌っていて、これについては、このソネットの中でも度々言及してきたことです。これについては、「リルケの空間論（個別論５）：悲歌5番」（2009年8月15日：http://shibunraku.blogspot.com/2009/08/5_15.html）をご覧ください。

さて、この空間のことから、第3連では、やはり、場所とういことが出てきます。そうして、その場所は、「竪琴が音高く鳴り響いていた場所」であり、それは、「聞きとることのできない真ん中」、宇宙の中心だといっています。この順序は、リルケの歌うべき順序なのです。この「聞きとることのできない真ん中」を、悲歌5番の最後の連でも、また第2部ソネットXXIの第4連でも、Teppich、テピッヒ、絨毯と呼ばれておりました。

これは、宇宙の活動のバランスの中心が現出する場所です。

このふたつの例で、絨毯という言葉が、その詩篇の最後に出てくるということは、この言葉をいうことで、リルケの気持ちとしては、それまで言ってきたところのものを、またすべて言いたいことを、この言葉で言いおおせているということを示しているのではないかと思います。

この宇宙の中心のために、お前と呼ばれる踊り子は踊った。ここまでの踊り子の行為がみな過去形であるのは、このソネットを献じたWeraという若い娘が既に死者であるからだと思います。

最後に、「男の友人」と呼ばれているのは、勿論オルフェウスです。その健康な祝祭のために、踊り子は踊る。オルフェウスとは文字の上では出ていませんが、訳では、それを表に出しました。そうしてみると、第4連の、

「オルフェウスの健康な祝祭のために、一度は、
歩行と顔（かんばせ）を、そちらへと向けることを願ったのだ。」

とは、第1連に戻って、踊りの星座という純粋な空間の中、絨毯の上に、宇宙のバランスの中心を現出せしめる試みと願いを歌っているのです。踊りをオルフェウスの祝祭に捧げることによって。この「ほとんど子供」である娘が、どれ位オルフェウスに親しいか、その踊りを踊る高さを持っているかは、第3連から第4連に歌われている通りです。

【安部公房の読者のためのコメント】

第３連と最後の連の「真ん中」は、安部公房の演技論の中核概念であるニュートラルのことを言つてゐる：

「お前と一緒に聴覚の方へ行こうと、長い間思っていたときにはいつでも、
一寸違っていた、奇異に思われた。お前は、竪琴が音高く鳴り響いていた場所を、まだ覚えていた。―　聞きとることのできない真ん中を。

この真ん中のために、お前は、美しい足どり、美しい歩調を試みたし、
そして、男の友人、即ちオルフェウスの健康な祝祭のために、一度は、
歩行と顔（かんばせ）を、そちらへと向けることを願ったのだ。」

それは存在の宿る真ん中の場所、即ち時間ではなく空間の凹の窪みの場所です。そこに導くモノが人間ならば案内人と呼ばれ、物であるならば立て札または標識または電柱に

貼られたビラと呼ばれ、動物ならばとらぬ狸と呼ばれる。それは何かと何かの真ん中にある隙間であり遅延であり差異である。これが、安部公房の世界観です。案内人の整理をしませう。『安部公房の奉天の窓の暗号を解読する～安部公房の数学的能力について～（後篇）』（もぐら通信第３３号）より引用します：

「さて、前期２０年の案内人は、次の通りです。

（1）手記（実は存在しない）：『終りし道の標べに』
（2）名刺（失われた名前の書いてある）：『S・カルマ氏の犯罪』
（3）とらぬ狸（存在しない）：『バベルの塔の狸』
（4）ニワハンミョウ（一度取り逃がして失った）：『砂の女』
（5）損傷した顔（失われた）：『他人の顔』
（6）依頼人の夫（失踪した）：『燃えつきた地図』

後期２０年の案内人は、次のようになるでしょう。

（1）箱男（失踪した男）の書いた箱の製法のマニュアル：『箱男』
（2）救急車に誘拐された妻（失踪した女）：『密会』
（3）ユープケッチャ（無時間ー永遠ーに棲息する＝存在しない）：『方舟さくら丸』
（4）カイワレ大根（脚に生える＝存在しない）：『カンガルー・ノート』

これらの案内人をみると、みな予（あらかじ）め失われたものと一言でいうことができることに気づきます。

この「予め失われたもの」は、空間の中では上記の名前で、予め失われたものとして登場しますが、時間の中では、予め失われた未来として「明日の新聞」と（最後に登場してそう）呼ばれ（戯曲『友達』、『密会』その他）、『第四間氷期』では、予言機械の予言となり、その予言は物語の最後に目に見えない暗殺者の足音と化してやって来て登場し、『砂の女』や『箱男』や『カンガルー・ノート』の最後に失踪や死亡を告げる一枚の紙として登場するのです。そうして、勿論これらの紙の媒体は、次の次元への案内人又は案内書として、その上位接続点（積算値、即ち奉天の窓）、即ち十字路の交差点に立つ方向標識板なのです。

言ってみれば、これらの案内人は、助けてもらったお礼に、浦島太郎を龍宮城という迷宮に案内する亀、即ち存在の遣わした使者なのです。龍宮城では、浦島太郎は過剰な接待を受けて、鯛や平目の舞い踊りに、酒池肉林の饗応を受け、場合によっては乙姫様から性的な接待も受けて（『砂の女』『他人の顔』『箱男』その他）時間をすっかり忘れ呆るわけですが、安部公房の主人公たちも同様の経験を、この異界の迷宮で経験するわ

けです。

そうして、その果てに、（過剰な接待に飽きて）いやもう故郷に帰りたいと主人公は思い、乙姫様（閉鎖空間の贋の支配者）に其の意図を告げると、それでは致し方ないはねと乙姫様はいい、但し絶対に開けてはいけないという否定的な禁止則の遵守義務とも云うべき条件を付けて、土産に玉手箱を授けてくれて、浦島太郎は、また同じ案内人の亀に背中に乗って、故郷へ帰ってくると、既に何百年も時間が経っていて、そこは既にそれまでの主人公の知っている故郷ではなくなっているわけです。

約束を破って、浦島太郎が玉手箱を開けると、白い煙が出て、それに当たった主人公は一気に時間、即ち時差という差異をゼロ（無）にしてしまい、或いはゼロ（無）にすることができて、龍宮城という閉鎖空間を脱出することができて、翁になってしまうというわけです。

確かに、安部公房の主人公たちも、最後には時差やその他の差異のすべてをゼロにして、死亡するか、失踪するかして、次の次元へと旅立つことに、いつもなっております。その時に、贋支配者たる乙姫様との約束を破って開けてしまう玉手箱は、それぞれの物語では、一体なんなのでしょうか？安部公房の主人公たちは、贋支配者たる乙姫様を通じて、その上に位する存在と一体どんな約束をしているのでしょうか？［註１８］

何度も言いますが、この存在は、差異という関係概念でありますから、奉天の窓の数ほどにたくさんあり、また従って、存在の数ほどに案内人の亀は有り、存在の数ほどに迷宮の竜宮城は有り（『S・カルマ氏の犯罪』『カンガルー・ノート』その他）、存在の数ほどに乙姫様は居るのです。あなたがご存知の通りの、多次元的な安部公房の物語の世界です。

［註１８］
この問いに答えるには、『もぐら感覚１８：部屋』（もぐら通信第１６号）をお読みください。

また、安部公房の作品の神話的構造については、『安部公房の変形能力１７：安部公房の人生の見取り図と再帰的人間像』（もぐら通信第１７号）の最後の方に、浦島太郎の物語のこととして、この神話の物語の本質（関係、差異）を簡潔に提示しておりますので、お読み下さい。」
（『安部公房の奉天の窓の暗号を解読する～安部公房の数学的能力について～（後篇）』もぐら通信第３３号）

そして、この最後から２番目の詩を読んで、私は安部公房スタジオの舞台と俳優たちの演技を想ひました。そして、安部公房スタジオの活動期間１０年のうちの前半５年間に

「周辺飛行」と題して連載した一連のニュートラル演技論を想ひました。今手元にある安部公房全集第２４巻を開いて、次の作家の言葉を引用します（P３３２ページ下段「写真のぞき―周辺飛行２０」）。（傍線は原文は傍点）

「ニュートラルになった俳優の存在は、しばしば沈黙のままで、じゅうぶんに表現体としての輝きを見せることがある。しかし、その沈黙は、けものの沈黙ではない。言葉と言葉のあいだに挿入された、語られない言葉、もしくは沈黙という言葉にほかならないのである。
　たとえば、戯曲の行間に指示されている、ほんの一行の短いト書き――

　　（間）　　」

この安部公房のニュートラル演技論の「（間）」について既論より引用して、ニュートラル概念の理解を深めたい。『安部公房の初期作品に頻出する「転身」といふ語について』（もぐら通信第５６号）より引用します：

「本題からは逸脱しますが、上記の［リルケのエッセイの］「（６）『室内インテリア』」の最終章XXIは、安部公房 の「空白の論理」によるいつもの構成と同じ構成になつてゐて、これは、安部公房が此の作 品を読んだかどうかは別にしてさへも、安部公房が相当広範囲にわたつて、安部公房全集に 採録されて読者の知ることのできる作品の数以上にリルケの作品を渉猟してゐたことを示し てゐます。あるいはさうでないとしたら、または、さうでないとしても、数少ないリルケの 「空白の論理」の余白と沈黙の表現に接して、安部公房はリルケの此の「空白の論理」を本 当に深く理解をした。即ち、この作品の最終章XXIに、『詩と詩人（意識と無意識）』にあ るのと同じ「空白の論理」に従つた章があるのです。

リルケの「（６）『室内インテリア』」の最終章：

「XX Wenn meine Mädchen wandern und sich bewegen, schwanken ihre Seelen langsam wie Kähne, die an ein unruhiges Ufer gebunden sind.― Denn ihre Seelen sind Gondeln von Gold und voller Ungeduld. （略）Und sie heben die Furcht vor diesen vielen Dingen in das seidene Dunkel ihres Lebens hinein und falten die Hände
davor. So sind ihre Gebete..

XXI..... ....」

［拙訳］「第XX章 私の処女（をとめ）たちが逍遥し、あちらこちらへ動く場合にはいつも、その 魂はゆつくりと、不安で定まらぬ岸辺に係留される筏のやうに上下に揺れる。ーといふのは、 乙女たちの魂は、黄金のゴンドラなのであり、だから我慢できないといふ性急な思ひで一杯 のゴンドラなのだから。（略）そして、私の乙女たちは、これらの数多くの物に恐れを抱き、 その恐れを、乙女たちが自分たちの命の、絹の暗黒の中へと持ち上げて入れ、両手を其の物 たちの前で重ねて折畳む。と、私の乙女たちの祈りは..

第XXI
章..... ....」

『詩と詩人（意識と無意識）』の中の第１部第１章「四、人間の在り方」の半ばに置かれた 次の余白と沈黙をご覧ください。：

「総てをかくあらしめるもの、それが夜である。此の吾等の判断も、表現も、生も、行為も、 幻想も、総て其れがある如くあらしめるもの、それが夜なのである。解釈学的体験、― 次 の数行の余白はその無言の言葉で埋められるのだ。（私は君達の自己体験をねがう為に此の 余白を用意したのだ） .....

.... そして人間の在り方は正に此の数行の余白によつて明確に示されるのだ。夜はかくあらしめ るものであった。」

（全集第１巻、１１２ページ下段）

また、中埜肇宛て書簡第２信にも、この沈黙の「……」がある。作品を書く場合のみならず、 日常の親しくゐるものたちにも、手紙の中で此の空白と沈黙を文字の間に挟んでゐる。此の 「……」をテキスト（文字）の間に挟むと、この「……」の両側の文字の間に隙間、即ち差 異の生まれる効果があり、また逆に、この空白と沈黙といふ差異の間にテキスト（文字）が あるといふ、関係が反転して、一種メビウスの環になるといふ効果がある。安部公房好みの 体裁に、文章がなるわけです。

「どうか君の現実に対する無理解をとがめないで下さい。 .....

..... 人々は魂を求め合つて居ます。僕流に云へば、人々は、自分自身に云ひきかせたがつて居 ます。……愛。 .....

…… 僕はもつとよく君を知りたかつた。（略）一人は僕の知つて居る人で、も一人は見知らぬ 人です。 ……

…… 君の云ふ愛について、どうか、何から何迄、具体的に知らせて下さい。絶対にかくさない で。僕には思ひあたる様な所があるのです。それとも僕にはそれを聞く丈の値打が無いでせ うか。 ……

…… 僕はあの会を創め、今それから遠ざかつて見て、如何に生命を持つた人間が少いかを、つ くづく知りました。（略）」（全集第１巻、７０－７１ページにある）

かうして見ると、安部公房の余白と沈黙の表し方は、上に引いた例のやうに、

（１）点線といふ記号によつて余白と沈黙を示すか、また、（２）『名もなき夜のために』の最後のやうに（ ）といふ記号によつて存在を示し、その 中に文字を書いて、これを話者や登場人物の語る、存在の中にある存在の文字とするか（例 へば、最初の小説の題名の『（霊媒の話より）題未定』や、最後の小説『カンガルー・ノー ト』の最後の呪文「（オタスケ オタスケ オタスケヨ オネガイダカラ タスケテ ヨ）」、あるいは、（３）『詩と詩人（意識と無意識）』の最後に第二部の印を漢用数字で示して、そのあとを 空白にして置くか、

この三通りがあることになります。

『名もなき夜のために』に次の箇所があります。：

「特にマルテの手記が二部に分かれていることを忘れてはならぬ。一部から二部へ移ってい くものの意味は、夜を支点として人間が如何に転身するかの記録でなければならぬだろう。 更にその総ての意味が僕自身の夜でなければならぬ。夜が如何にして一切を奪って行った か……それからそれをどんな仕方でもと通り、いや場合によっては一そう満ち足りたものと して返えしてくれたか……しかもその後、仕事をし了えて放心したリルケの呟きの中で、も う書き得ないものとして待っていた無言の第三部、その空白を流れる限りない日常の悲しみや悦びをふと想い浮べることがあったら、僕たちも転身の意味を本当に悟ることが出来るか もしれない。その空白が既にオルフォイスのソネットやドイノの悲歌を生む約束になってい

たなどと考えることで、それを単なる変化や移行にしてしまうのは容易だが一そう恐ろしい ことではなかろうか。僕たちに残された一番確実な遺産は、決してリルケの神のような死で もなく、飛翔にも似た転身でもなく、実にあの侘しい空白であったということ……それから 後何んな鎖があると云うのだろう。（略）」（全集第１巻、５１９ペー

ジ上段）（傍線筆者）

『マルテの手記』が文字で、これは第一部、ここからは第二部と明示されてゐる訳ではあり ません。安部公房が第一部第二部と呼んだ前後は、形式上または体裁上は、「アペローネ、 僕は君もここにいるように考える。君にはそれがわかるかね、アペローネ？君にはそれがわ かるにちがいないと僕は考える。」と終わる箇所が第一部の終わり、そして、余白を残して 新たにページを立てて、「今では、女と一角獣の壁掛けはブサックの古城にはない。」で始 まるのが第二部といふことになります。

今私の手元にあるドイツ語のインゼル版のペーパーバックスの『マルテの手記』はさうなつ てをり、岩波文庫で出てゐる望月市恵訳でも、ページを改めての、更に最初に数行の余白を 置いての、第二部を始めてゐます。当然のことながらドイツ文学の専門家である訳者は、こ のリルケの意図を十分に知つてゐた。

上の引用で「一部から二部へ移っていくものの意味は、夜を支点として人間が如何に転身す るかの記録でなければならぬだろう。」とありますから、安部公房の夜は此の第一部と第二 部の間の余白に存在するのです。そこには夜があり、他の両側の二つの部立てに対しては、 その夜は支点である。二つの部門は、この余白、空白、沈黙があつて初めて均衡を全体とし て保つて表に、さういふ意味では昼間に、成り立つといふのが、安部公房の論理であり、思 想です。しかし、これはまたリルケの論理であり、思想です。

そして、引用中の二つ目の「……」といふ文中の余白の後にいふ、「しかもその後、仕事を し了えて放心したリルケの呟きの中で、もう書き得ないものとして待っていた無言の第三部、 その空白を流れる限りない日常の悲しみや悦び」とある此の第三部は、もともと本来の『マ ルテの手記』にはない部門です。これは『詩と詩人（意識と無意識）』に繰り返し論ぜられ た、哲学談義を親しく交わした友中埜肇と議論したあの論理、即ちAでもなくZでもない、 即ち両極端を排して、第三の客観または第三の道を求める論理なのです。右でもなく左でも なく、上でもなく下でもなく、生でもなく死でもない、第三の客観、即ち（詩人が自己を捨 て、自己喪失をし、自己の記憶を忘却して次元転換を果てしなく続けて至る、自己の最高度 の、極限の反照としてある）存在、です。［註９］

［註９］ この、安部公房独自の論理については、『詩と詩人（意識と無意識）』（全集第１巻、１０４ページ）をお読 み下さい。

このやうに、安部公房十代からの此の論理の上に、安部公房は新たに『マルテの手記』の解釈を加へて、詩人から小説家になる為に、『マルテの手記』を自分自身のものとする為に、 あるいは『マルテの手記』を超越するために、「空白の論理」の中に第一部で

もなく第二部でもない第三部、即ち第三の客観、即ち存在を仮構して、この作品をまとめたのです。

第一部でもなく第二部でもない、第三部。それが、最後に安部公房が『名もなき夜のために』 の付け加へた存在を示す（ ）の中に敢へて書いたテキスト（文字）なのです。

「（此処に空白がある。空白の告白がある。これが恐怖なのだろうか。僕は欺瞞が苦しかっ た。まだとどまっていると思わせる駆け引きいやだった。僕ら人間を物への供物としよう。 名もなき夜に生きて昼を織り出すものとなろう。 ある日……。）」（全集第１巻、５５８ページ下段）

ここまで考へてみれば、この最後の、（ ）で象徴される存在の中の文字を読むと、安部公房が何を考へてゐるかは、よくわかります。「ある日」もまた空白と沈黙の中にある。「ある日」の物語もまた空白と沈黙の中にある。何故なら其れは特定の日ではなく、「ある日」 だからです。

そして、「転身」は、この（ ）の中や「……」や（文字通りの物質的な）余白の中、即ち夜の支点の余白と沈黙の中で、人知れず、誰とも名前を言はれずに、おこなはれるのです。 安部公房の意識と無意識の入籠構造であり、螺旋構造です。

そして、このやうな（ ）と「……」と（文字通りの物質的な）余白の使ひ方は、このまま、 領域を問はぬ、安部公房の作品の入籠構造または螺旋構造をなす話中話、劇中劇の構造にな つてゐます。」
（『安部公房の初期作品に頻出する「転身」といふ語について』（もぐら通信第５６号））

「このやうな（ ）と「……」と（文字通りの物質的な）余白の使ひ方は、このまま、 領域を問はぬ、安部公房の作品の入籠構造または螺旋構造をなす話中話、劇中劇の構造になつてゐ」るのは、この言葉の通り其のまま安部公房スタジオのために作家の書いた戯曲の構造になつてゐます。演技論が其のまま戯曲構造である。これば、戯曲に限らぬ、安部公房の世界の作品なのです。何故、さうなのかと云へば、安部公房の意志は、成城高校生であつた十代の時代から、世界と作品の構造を言語の構造其のものと一致させて一つのもの一体のもの、即ち言語表現を存在となすことにあるからです。このことについては次の論考に詳述しましたので、ご覧ください。

（１）『安部公房の初期作品に頻出する「転身」といふ語について（１）から（４）』（もぐら通信第５６号から第５９号）：
(a)第５６号：https://docdro.id/SheWeQu
(b)第５７号：https://docdro.id/Ep6tfMh
(c)第５８号：https://docdro.id/sXNnTZh
(d)第５９号：https://docdro.id/3LMqUO5
（２）『デンドロカカリヤ論（前篇）』（もぐら通信第５２号）：https://docdro.id/1a3J4RE
（３）『安部公房文学の毒について』（もぐら通信第５５号）：https://www.docdroid.net/4qjfEaF/55.pdf#page=2

サンチョ・パンサを求めて
（5）
安部公房と三島由紀夫の超越論を理解する方法

岩田英哉

君の中の「君」へ、

今、三島由紀夫の読者が、特に愛読者が三島由紀夫の超越論を理解するための単刀直入な方法を思ひ付いたのでお伝へしたい。

それは、自分で今遺言状を書いてみる事です。

何がいひたいか。

今僕は頼まれて、ドイツ語で書かれた遺言状と関係するドイツの民法に基づく裁判所の出す法的文書の翻訳をしてゐるのですが、これがまた法律といふやつは人の死後のことまで考へて生きてゐるものたちの世界での遺産の処理手続きを定めるといふ文書なのです。そして、故人の手書きのドイツ語の遺言書がある。

さて、翻訳しながら、自分が今遺書を書いたらどんな構成（枠組み）でどんな順序でどんな文章を書くかと考へてみたら、なるほどこれが超越論か/だといふことに思ひ至ったので、一筆啓上といふ次第です。

自分の死後（未来）に立って、現在起こるべきこと（未来から見れば過去である現在です）を記述するのです。それも単なる事実の記述ではない、そのやうな死後の自分の現在の自分の意志の実現を書くのです。この意志は日本語の訳語では意志ではなく、意思と書くことが法律用語になつてゐる。明治の人が意志ではなく意思の漢語の文字を選んで当てたのは、死者には志は既になく、あるのは思ひだけだといふことからであらうか。それとも思といふ文字面から言つて、体系的な記述即ち叙述を必要とする生きて遺言の意志を受け取り実行する側の人間の義務への思ひを反映してゐるから意思なのだらうか。

三島由紀夫ならば死後にお子さんたちのために誕生日のプレゼントの配達を予め（といふことは超越論的に）手配をしたといふことが日常の時間の中での分かり易い判断の例です。同じ事を言葉で文章で書いたのが三島由紀夫の作品といふことになり、このやうに三島由紀夫の作品を理解するといふことであり、理解することができるといふことです。特に、最後の『豊饒の海』の第４巻は死後の時間にまで物語が延長されて書かれてゐて、最後の有名なお寺の庭前の静寂から第１巻の冒頭に話が忘却と共に回帰するといふ結構は、三島由紀夫が安部公房と談じ論じた楽しい二人の姿を想はせるのだ。

昨日が11月の25日で三島由紀夫の命日ですから、といふ今日にドイツ語の遺言書を翻訳しながら此の文章を書くのも何かご縁のあることでせう。三島由紀夫が自ら古典時代と呼ぶ時代に愛読したトーマス・マンならば、昼間はドーランを落とした役者のやうに生活するといふことですし、ニーチェならば（安部公房もニーチェの愛読者だつたから同様に）死者のやうに時間の中を/で生きるといふことでせう。

ドイツ語の法律的文書を読みながら、ああ此の年になつてやつと少しはドイツ語が理解できるやうになつたなあといふ感慨を覚えたのです。このやうな法律文書を読むと、それも人間の生死と生きてゐた人間の意志に関わり/基づく文章を読むと、昔からのドイツ人の生活や社会や国家といふものに対する考へ方や思ひが理解できるのだ。少なくともさう思ふことができる。多分、今なら同じことが日本語の法律文章を読んでもわかるだらうと思ふのです。三島由紀夫が法学を学んだといふことは、いやいや父親の命令に従ったかも知れないとはいへ、正しいことではなかつたか。本人はさう思つてゐた筈です。即ち、

此処に、そして此の死に際しての意志に関係して、様式（文体；style；処理の手続きの形式）のある以上、最初の一行が書かれる時には既に最初から（これが超越論）同時にー同時にとは何か？ですー最後の一行が書かれ終はつてゐたといふことです。これが三島由紀夫の原稿の書き方であつても少しも不思議なことではない。

安部公房ならば、これも傑作、僕の好きなSF『第四間氷期』の主人公勝木博士の遺言書であるモスクワ２号といふ電子計算機（コンピュータ）の未来に関する予言が、そのまま現在たる時間に博士の現実として実現する話となんら変はらない。それでは過去はどこに行つた？過去は未来からみた現在であり、今のこの現在は未来からみた過去である。それ故に、過去に書かれた遺言書は実は未来の予言であつて、現在といふ現実に実現するのだといふ理屈です。さう、安部公房の世界では、「明日の新聞」といふニュースがいつも今日此の世界の果てに主人公が行き着いた其の場所に「いつの間にか」「どこからともなく」（超越論的に）、このやうに配達されるのです。即ち、時間を単位化すれば等価交換が可能ですから（時系列の順序にはよらずに）、

（１）今日は明日の昨日
（２）明日は昨日の今日
（３）昨日は今日の明日

といふ論理が実現して、最後には勝木博士はモスクワ２号の予言の通りに殺し屋に殺される直前の、安部公房らしいことに幕の上がる前で、といふことは此の超越論の論理で云へば幕が降りてしまつた後でといつても同じですが、話が終はつてゐます。

といふことは即ち、この文章を書くといふことは、実は遺言書を書くことに等しいことなのではないかな。

実は上記の（１）から（３）が一気に理解できたら、神道でいふ中今といふ概念をあなたは理解したことになるのです。これをヨーロッパの近代の哲学者たちは、ヘーゲルの系譜の共産主義に対抗して超越論と呼んでカント以来、よくいはれる名前で云へば生命の哲学として伝へて今日に至るのだ。しかし、縄文起源/紀元の僕たちの超越論の時間概念である中今の方が、唯一絶対神の外部が自然であることを肌身で知つてゐるだけ奥が深く、深さも深いのだよ。何しろキリスト教の教義に対抗して、彼の地のやうには頭で考へた理屈ではないからね。

さうさう、安部公房は繰り返し、ラジオやTVや新聞でニュースを知りたいといふのは、聞いて安心したいからだ、といふ大衆心理に/を言及してゐるよ。この大衆心理の問題は２０世紀からの持ち越しの２１世紀の依然として課題だね。さて、一体どうしたものか。僕は日本人が自分自身を大切に思ひ出すことだと思ふな。そのためにネット・メディアを活用すべきだといふのが僕の持論だが、さあ果たして日本人の遺言書が今現在の今日、如何に書かれてゐるのか、これが昨日である明日である今日の問題だ。超越論で考へれば、答へは既にして出てゐる、即ち僕たちは知つてゐるのだ、最後の一行を既に書き終えてゐるのだ。そして、これが一神教のキリスト教の終末論ではないといふこと、これが彼奴等には理解ができないのだ。

では、また。

Mole Hole Letter

（２４）

1+1=2

岩田英哉

小学校の一年生に入って初めて足算を教わって、以来理解できなかつた、

１＋１＝２

といふ等式が、何故成り立つかと云ふ形式論理による数学的証明をしてくれてゐる動画を発見しました。これでよく理解ができた。あなたはどうやつてこの　1+1=2　といふ等式を理解できたのか？教へて欲しい。お蔭で、今でも足し算のできないトホホの私です。次のURLです：

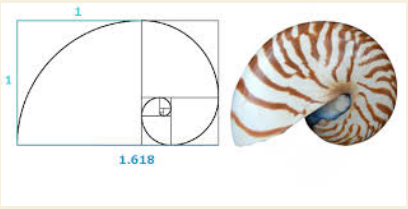
https://www.youtube.com/watch?v=6XUNqeiJmrg

この解説を視聴して解つたことは、言語論の視点でいふと（何しろ私は言語との関係で理解する以外に能のない人間なのだ）、自然数とは、

（１）再帰的である（自然数自体に繰り返し戻ってくる（再帰する）
（２）ネスト構造（自然言語やソフトウエアプログラム（人工言語）の構造と同じ）である

といふ説明をしてゐることになります。即ち、

あの貝殻の美しい渦巻構造であり、螺旋構造です。即ち、貝殻の渦巻紋様と云へば、自然数の世界で云ふフィボナッチ数列（自然数）の世界である。：https://ja.wikipedia.org/wiki/フィボナッチ数



そして、足し算とは、時間の中での演算ですので、時間の中で此の再帰的な渦巻ができるといふことは、この証明方法と此の１＋１＝２と云ふ単純な等式の意味するところは、たとへば今思ふ例を挙げれば、伊勢神宮の２０年毎の式年遷宮は、この数式の証明方法に倣へば、この遷宮の式次第は超越論ですから時間を捨象しての繰り返しの様式ですので即ち二進数で私たちは古代以来考へてきて式次第、様式次第をとりおこなつて来たといふことになるわけですから、１＋１＝１といふ演算を繰り返し２０年毎の節目に計算して来たといふことになります。

ここから、また私の連想は飛躍するのでありますが、縄文土器にもし着色がなされてゐれば、その色は、やはり１＋１＋１＋……＝１といふ計算で縄文人の私たちは計算をしたのではないでせうか。即ち、絵画でいふならば、青い色に同じ青い色を塗り重ねても同じ青い色であるやうに、１＋１＝１であるといふことです。１x N個の１＝１。

さすれば、また色彩より転じて、この渦状紋と云ふ形象は何かと云へば、やはりこれも、あなたが鉛筆を手にとって、真っ白な紙に一筆書きの迷路を描かうとして描けば、ああら不思議、縄文人のあなたは縄文土器と同じNest構造の渦巻模様を描いてゐる。これは、誰がやつても同じになります。これを矩形の迷路にするか、円形の渦巻の迷路にするかどうするかは、あなた次第で、あなたが決めることであり、あなたの自由です。即ち、

縄文土器のあの渦状紋を見てから、目を転じて目がグルグルと廻ると辺りは、天地は転倒し、左右は交換されて右左なく、眼前茫然として、これ皆混沌として見える。この、世の中の混沌を整理しようとして、私たちは、古来、

（１）再帰的である（自然数自体に繰り返し戻ってくる（再帰する）事を自覚し、
（２）ネスト構造（言語構造である入籠構造）である事を紋様に描き、
（３）世の中を渦巻模様に思ひ描いて世の中の仕組みを構築して来たのではないでせうか？

二次元の渦巻模様は、三次元では螺旋階段の螺旋構造（遺伝子の構造）、四次元では？四次元ではどうなるかと云へば、位相として時間の中にある三次元の世界を観ずるといふのが此れではないでせうか。即ち、

世界は鏡に映る流れ（時間）の泡沫（うたかた）である。

これは、鴨長明の方丈記の次の出だしに同じですね。

「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。 淀みに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。 世の中にある人とすみかと、またかくのごとし。」

そして、２０世紀の超越論の作家安部公房のエッセイ『シャボン玉の泡』の最後の段落に、鴨長明の文章が、これまた何と通じてゐる事か：

「　ゴミ捨て場から聞こえてくる悲鳴は、どうやら、ゴミを食うヌメにくわえこまれ、咀嚼はじめた「有用性」の叫びらしい。すくなくともぼくには、そんなふうに聞える。まだ自分がゴミそのものではないという自覚（もしくは幻想）が、かろうじて日常を支

えてくれているシャボン玉の皮なのだ。そのシャボン玉の皮の上に、たぶん明日も、ぼくはなんとかゴミを食う沼の見取図を書きつづけることだろう。もしかするとゴミは砕かれた人間の伝説なのかもしれない。」
（『シャボン玉の泡』全集第２４巻、４１９ページ）

世界は鏡に映る流れ（時間）の泡沫（うたかた）である。

といふ鴨長明の一行は、次の二行に分かれる。

（１）世界は差異である。
（２）価値は等価で遍在する。

世界に差異がなければ、流れならば渦巻がなければ鏡に何も映らず、なぜならば世界は元々のつぺら坊だから。そして、これを埴谷雄高も安部公房も存在と呼んだ。渦巻は二つの時間が同期せず（差異）、遅延が生ずることで生まれます。乱気流然り、鳴門の渦巻然り。一筆書きの渦巻紋様然り。

安部公房の存在の形象

一枚の布が舞台を覆ひ、俳優たちが布の内部に入り/出て、外部に出て/入りして凸凹をのつぺら坊から生み出す存在の舞台。

埴谷雄高の存在の形象

「すると、薄暗い卓上に觸れるほど前かがみになつた青服から、ゆつくりと片手の掌がこちらへ差し出された。
――お嬢さん、のつぺらぼう、をご存じでしようか……？
――のつぺらぼう、ですつて……？
あまりに意想外の質問に、薔薇色の頬からさつと蒼味を帯びた幾筋もの小さな帯が横へ走つた。
――あの、目、も、鼻、も、口、も、何もない、つるりとした顔のことですの……？
――それをご存じなら、ひとりの男が夜道で、のつぺらぼう、に遭い、あわてて飛び込んだ場所でその話をすると、聞いた相手が、こうですか、とその顔を掌でひと撫ですると、その男の顔もまた、のつぺらぼう、になつてしまう話を知つておられると思いますので、申しあげますが、撫でられる顔が果て知れぬ大宇宙で、撫でるのがこれまた果て知れぬ巨大な掌だ、とすると、その巨大な掌でさつと撫でられたあとは、どうなるでしょう……？
――まあ、まあ、その巨大な掌で撫でられると、大宇宙の目も鼻も口も……つまり、大宇宙のありとあらゆるかたちのすべてが見る見る裡にに忽ちなくなつてしまう、といわれるのですの？」
（埴谷豊全集第３巻『死霊』８７９～８８０ページ。講談社。）

価値が等価で遍在することがなければ、空間といふ差異に隙間に余白に凸凹に、即ち泡沫（うたかた）といふシャボン玉の皮も生まれない。凸凹から生まれたシャボン玉も凸凹でできてゐる。シャボン玉の内部と外部を等価交換すれば、外部の世界も皮がめくれて、世界は裏返しになる。本当かな？

それで、私たちはお祭りの時に、それを個別にそれぞれの民族の言語でカーニヴァルと呼ばうがフェストと呼ばうが、仮面を被るのではあるまいか？私たちが裏返ししになり、世界が一緒に裏返しになるために。かくして、私たちは此の空間を脱出する、escapeし、exitする、あるひは逸脱する、滑る、下落する、落下する。

安部公房の傑作『他人の顔』を今読み直してゐるので、結末がこんな話になつてしまつた。安部公房は此の作品の中で、仮面と仮面劇といふ言葉に、自分の存在論の記号を用ひて、《仮面》《仮面劇》と、この物語がノートブックに書かれた存在論の物語である事を、ノートブック形式を利用したメタフィクションの中で、明らかにしてゐる。加へて、ノートブックの《欄外の挿入I》に《欄外の挿入II》といふメモ書きまで、本編の文章の隙間、余白に、差異に、挿入されてゐる。

といふわけで、この一文も最初の目論見から大きく逸脱し、落第してしまつた。最初の目論見は、

1＋1＝1

これを、人間の主人公について、安部公房は《偽りの顔》と書いてゐる。前者の1が本物のあなたの顔で、後者の1が《偽りの顔》であれば、（そして時間の中ではお祭りの仮面のことに言及したやうにいつもさうなるのですが）、そして結局、あなたはいつも同じ1だと思はれてゐて……

《時間は此のまま無限に続くのだらうか？》、さうであれば、
《私は此のまま永遠に私なのだらうか？》それとも、……
　私は此のまま永遠に《私》なのだらうか？、それとも、……

これを、主人公について、安部公房は《偽りの顔》と書いてゐる。前者の１が本物のあなたの顔で、後者の１が《偽りの顔》であれば、そして時間の中ではお祭りの仮面のことに言及したやうにいつもさうなるのですが結局、あなたはいつも同じ１だと思はれてゐて……。昨日も今日も明日も、どちらの１が《偽りの顔》であるか本物の顔であるかはどうでも良いのだ、要するに、あなたはあなただと誰も疑ふことなく、誰にも疑はれず、恙無い日常の時間の流れに泡沫（うたかた）の如く浮かんでゐる。ところで、

（以下、存在論長屋での熊公と御隠居の問答）

熊公の問：《時間は此のまま無限に続くのだらうか？》.....【二者択一形式の疑問文：selective question】
御隠居の答：
（１）肯定：《時間は此のまま無限に続く》
（２）否定：《時間は此のまま無限に続か無い》
（３）二項対立否定論理（超越論）による答：時間は此のまま無限に続くことはなく、無限に続かないといふこともない。これが続くといふことである。
問：それなら、御隠居、有限でも無限でも、続くといふことでは同じではないか？
答：然り、然り。
問：続けばいいのか？
答：然り、然り。
問：それなら、御隠居、有限無限はどうでも良いといふことなのか？
答：然り、然り。
問：といふことは、問題は、続くか続かないか、連続か非連続かといふ問題なのだな？
答：然り、然り。そして、それが位相で物事を眺めるといふことぢや。即ち、連続なく、非連続なし。
問：それなら、家賃も払ふのはやめようつと。
答：それはまた別の話ぢや、連続しておくれ。
問：然らば、連続が先なるか、非連続が先なるか？
答：熊公や、また最初の問の形式に戻つてしまいおつたな。仕様のない奴ぢや。家賃については連続なく、非連続なく、常に先払ひぢや。
問：《.....》

ネット・メディア論
（３）

岩田英哉

目次

０。はじめに
１。国家とは何か
２。用語の定義
３。メディアとは何か
３.１　マス・メディアとは何か（２０世紀）
３.１.１　世界観としてのマス・メディア（一神教のtopology）
３.１.２　マス（mass）とは何か
３.１.３　マスとプロパガンダ
３.１.４　マス・メディアとプロパガンダ
３.１.５　１９４５年までの日本国家と１９４５年以後の日本国家の関係
３.１.６　マス・ジャーナリズムとは何か

３.２　ネット・メディアとは何か（２１世紀）
３.２.１　世界観としてのネット・メディア（超越論のtopology）
３.２.２　ネットとは何か
３.２.３　ネットとプロパガンダ
３.２.４　ネット・メディアとプロパガンダ
３.２.５　ネット・ジャーナリズムとは何か

４。ネット・モナド論
４.１　モナドの概念と定義
４.２　ネット・モナドの概念
４.３　ネット・モナド(personal)の定義
４.４　日本国の位相史上のネット・モナドの位置
４.５　ネット・モナドの対象とする監視・調査項目
４.６　Topologyで右翼と左翼の関係を明確にする
４.７　象徴とsymbolの関係再説
４.８　メデイアとしての三種の神器：三種の神器に共通する概念は何か
４.９　カミ（神）とは何か

５　公私とは何か
５.１　公私の最小単位
５.２　マス・メディアでの公私とは何か
５.３　ネット・メディアでの公私とは何か
５.４　一神教の公私
５.５　超越論（汎神論的存在論）の公私

６。二階層戦争論とメディア論の関係
６.１　ネット・メディアの問題を二階層戦争論で考察する
６.２　ネット・ヘゲモニー問題とは何か
６.３　二階層戦争論による解決策

７。政治形態と自由
７。１　自由とは何か：libertyとfreedomの違ひ
７.２　公私の最小単位再説
７.３　政治形態E&Aの公私：一神教のtopologyの政治形態
７.４　政治形態Jの公私：高天原のtopology（超越論）の政治形態

８。私たちは如何に生きるべきか
８.１　学歴無用論
８.２　学問有用論

青字は既論の章、赤字は今回論ずる章、黒字は此れから論じる章

＊＊＊＊＊＊

４.４　日本国の位相史上のネット・モナドの位置

位相史観、鏡史観で日本の国の歴史を見ると、ネット・モナドがどの位置にあるかを示します。ダウンロードは：https://docdro.id/yCZazDa

歴史的に、または歴史学的に見るのではないので、時間は捨象され、西洋近代のことに１９世紀後半にスエーデンで始まった神話学［註１］のいふ古代の神話と現代の現実との意識の上での識別も、区々たる区別も、そもそもない。神話学も近代の唯物的なヨーロッパ文明に対する反省から彼らが自分たちのために必要として生み出したもので、この近代は生まれ素性から云つて本来私たちのものではないことは自明である。日本は再帰的に日本自身に、ヨーロッパ近代がさうしたやうに、自分の生まれ育ちに戻らうといふことです。これが、ネットの上で出来るといふことが面白く、不思議なことですが。

やはり、私が想を得た１７世紀ドイツのライプニッツは、かうして見れば、一神教のtopologyの否定者、即ちヨーロッパ近代の歴史を俯瞰すれば、近代ヨーロッパの共産主義の歴史の否定者です。同類の１７世紀のバロックの哲学者たちは皆さうだと考へて良い。と、そのやうに考へを置いて論を進めます。即ち、彼らはインターネットのtopologyを、その実現性は素材にも技術にも当時はなかつたが（物理層の話）、論理の上で（論理層の話）は現代を実現してゐたといふことです。

2019/11/24
岩田英哉

ネット・モナド視点で観た日本位相史（鏡史）
（超越論である位相史観、鏡史観に依る）

1867 明治維新　1945 大東亜戦争での敗戦　2019 令和元年

													備考
高天原	イザナギの命（の体）	左眼	獺れを祓ふ	天照大御神	瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）	三種の神器（八咫の鏡、草薙の太刀、八尺瓊勾玉）：天皇（すめらみこと）	初代神武天皇以来今上陛下までの１２５代の系譜	大八島（日本列島）	日本書紀（漢文で書かれた歴史書/時系列の事績書）：時系列の書	近代国家としてある古代国家（大日本帝国）	偽装・誤訳・偽善国家日本	［日本帝国］	天照大御神と月読命といふことで日本の国の均衡が保たれて来た/ゐる。
		鼻		素戔嗚命								素戔嗚命	この狼藉者は均衡（バランス）の破れにいつでも登場する
	イザナミの命（根の国にゐる）	右眼		月読命		神社A、B：全国津々浦々の神社			古事記（時間を捨象して日本語（和用漢字）で書かれた位相史、鏡史）：超越論（汎神論的存在論）の書			ネット・モナド（といふ汎神論的存在は、イザナギの命の右目から生まれたといふ系譜になる）	ネット・モナドは昔風に云へば無名の民草である。しかし異なるのはmobileと云ふ武器を手にしてゐること、そして無数の月読命が汎神論的にネット上に存在してゐることである。

時間の中に国が降りて来るに（生死の別が生まれるに）際して時間の中にあることで生まれる穢れを祓ふために御祓をした

文字輸入による国土と自然に対する穢れを祓ふために二種類の仮名が生まれた

［註２］

［註１］
https://ja.wikipedia.org/wiki/神話学

［註２］
日本書紀と古事記の関係、編纂方針の違ひは実に明確です。これは如何にもトポロジー民族の日本人らしいのです。言語論として分類の観点から二つの史書の相違は次のやうになります。

分類には二種類あります。一つは項目分類、もう一つは時系列分類です。古事記は項目分類、日本書紀は時系列分類。前者は「あいうえお」分類、後者は時間順序分類、要するに、前者は位相史であり、後者は歴史史である。私の身内に生きてゐるトポロジーの感覚と論理によれば、天武天皇以下文章博士たち（太安万侶含む）のこれら二つの書に対する命名と漢字による最初の表記は次のやうなものでした。

（１）古事紀
（２）日本書記

しかし、紀とは紀元節と書けるやうに、また私たちが時代区分の上位概念として縄文紀元と呼ぶことができてゐるやうに、これは周期的定例的に繰り返し反復し再帰する（例へば伊勢神宮の遷宮をみよ）、さういふ意味では超越論の譜です。将棋や囲碁の譜図の譜、棋譜の譜であり、変化の型です。それは機能的な物事の姿で、時間は其処には存在してゐません。これに対して記録の記、書記役の記は、時間の中で又は時間の順序で書くことを意味してゐます。今白川静著『字統』によれば、紀といふ文字の概念との関係では、記録の記といふ文字の概念は比較して次のやうなものです：

「形声　声符は己（き）。己（き）は糸を収束する器で、糸かずをそろえて巻きとることを紀という。紀（き）に「しるす、数える」などの意がある。それを筆墨のことに及ぼしていうものが記で、記録・記載・記事の意となる。また転じて記憶・記誦のように用いる。」

ですから、古事記の位相史は紀史、日本書紀の歴史史は記史と呼んでも良い、これら二つがあるといふことです。これを天武天皇の御前にて、topologicalに概念の、従ひ文字の、等価交換をして、次のやうな今日ある、

（１）古事記
（２）日本書紀

としたのです。

かうして、二書は均衡（バランス）を保つ二書一対といふ片葉片葉の通りの、万葉の事の葉（端）通りの宇宙樹の、御神木の、天（あめ）の御柱の通りの、前者は日本語の一語一音一義に基づいて（これから二つの片葉片葉の等価の仮名文字が二種類生まれるやうに）書かれ、後者は古代支那語で漢字で書かれることができたといふわけです。この二書のこのやうな等価交換によつて、文字を受容するに際して生まれる穢れを祓つた。これによつてもまた穢れは時間の中にあれば生ずると私たちが考へてゐることが判る。本居宣長は前者をやまとこころの書と呼び、後者を漢意（からごころ）の書と呼んだ。これは少しも間違ひではありません。確かに其の通りです。前者は後者の穢れを祓ひ、それで初めて後者は時間の中で叙述され得る。このお祓ひの関係は前述したカタカナとひらかなの仮名の、真名（漢字）に対する関係に同じです。一見二義的・二次的な位置にある古事記がなければ、一義的・一次的な位置にある日本書紀は無いのです。影が無ければ人間は無く、穴が無ければドーナツは無い。それ故に古事記が先に（７１２年）、日本書紀が後に（７２０年）、そして同じ天武天皇の元で編纂されたのです。これが、私たち縄文紀元以来の日本人の固有のtopology（位相幾何学）なのです。是神道也。この道はtopologyの道ですから一筆書きの道です。それでは、カタカナとひらかなのどちらが先に生まれたのでせうか？別途『縄文紀元論』の日本語文字論の章で詳述します。穢れを祓ふとは何か？といふことの本質が一層よく我事としてあなたには理解される筈です。天武天皇の事績の最たるものは、現代人の目には見えねど、位相幾何学で、また言霊の力で、漢字の穢れを祓ひ、二書を同じ御祓をしてものしたこと、この二つを同時に成し遂げたことだと云ふことになります。これで日本の有文字文明が確立した。まあ、何と云ふ叡智であることか。

ネット・モナドであるあなたの左眼は天照大御神であり、右眼は月読命である。これが日本位相史上の、超越論（汎神論的存在論）に依るあなたの位置であり、位置に備はる自由である。この位置にゐて、あなたは即ちイザナギのミコトである。そして、次章に挙げる二階層の項目を、国家権力との関係で、あなた（personal）自身の命の安全保障のために、または個衆（personals）のために、体ごと汎神論的存在論的にイザナミのミコトとして、監視し調査するといふことです。もしあなたがデジタルなゲームをパソコン上でまたはネット上で遊ぶ趣味の持ち主であるならば、この感覚と論理はRPG（Role Playing Game）だと思へば理解は容易ではないかと察します。

このやうに考へて来ますと、私たちが毎日朝顔を洗ふといふことの意味は、他の民族とは異なつてゐて、実は私たちは毎朝穢れを祓つてゐるのではないだらうか。さうして、左眼からは毎朝天照大御神が、右眼からは月読命が、鼻の穢れを祓へば素戔嗚命が、毎朝無数に此の国に生まれてゐるのではないだらうか。即ち、私たちは、均衡（バランス）は常にほつれ、破れることを前提にものを考へてゐるといふことです。しかも、身体感覚、生理感覚、心理感覚と分かち難くさうである。これが日本人の優れた直観力の源泉ではないでせうか。直観力とは、既述の通り、無媒体・無媒介で、といふことは無時間で、従ひ空間的に即ち形象として、直かに対象の本質を知る能力のことです。無媒体・無媒介であるので、媒体の最たるものである言葉は不要であり、無用である。この沈黙が、政治・経済・文化の範疇のみならずその他のあらゆる範疇に亘つて、私たちの文化の根底にあるのではないでせうか。

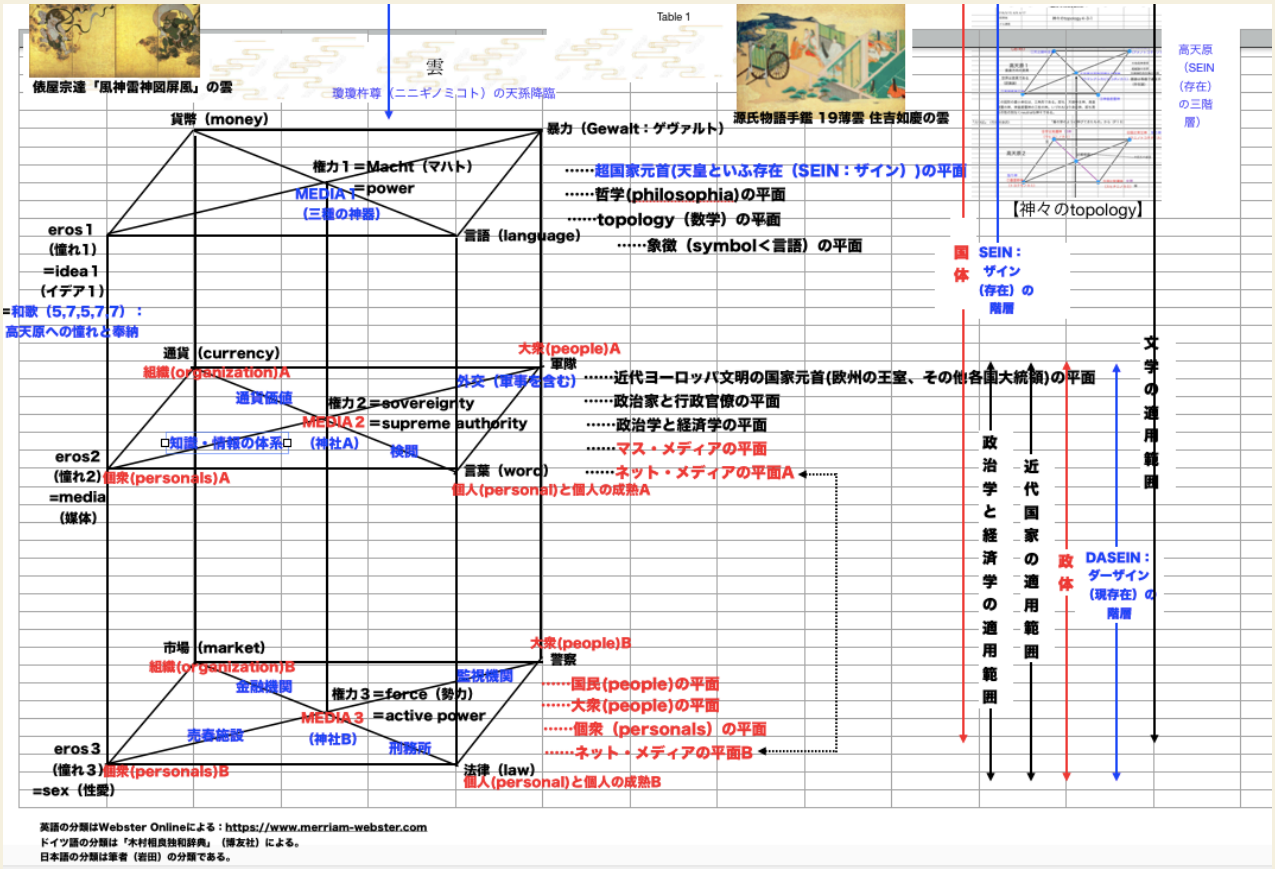
また、私がこのやうに考へて来て思ふのは安部公房の此れも傑作短編『人魚伝』です。この物語の中では主人公の男は（若者と思はれる）、人魚を家の浴槽に入れて大切にするわけですが、いつの間にか自分が分身して何人もの自分のゐることに朝起きて、眠りから覚めて時間の中に意識が戻ると、気づく。この人魚は食人人魚なわけですが、ここまで残酷ではなくとも、私たちは汎神論的存在論の持つ夢幻的な残酷性を知つてゐるといふことになります。この物語に素戔嗚尊を演ずる均衡と対称性を破る乱暴狼藉者が何であるものかを問ふと、男女の性を交換した人魚であるかも知れませんし、かうなると、素戔嗚尊は安部公房の好きな用語を使へば無法者（アウトロー）ですから、箱男は現代の素戔嗚尊だと考へてみると、箱男といふ何人も時間の中に汎神論的に存在する主人公は確かに反劇的な英雄たちであつて且つ一人の英雄であるといふ私たちの襲名披露の様式に従つて［註３］名前（箱男）と人格を、無時間の空間の中で（この場合は無名の徒即ち存在として）継承してゐるといふことがいふことができます。

［註３］
『縄文紀元論（２）』（第１０９号）を参照下さい。欧米の科学の紐理論といふ宇宙起源論との関係で、私たちの襲名披露の論理の説明をしました。

４.５　ネット・モナドの対象とする監視・調査項目

Mobile（スマートフォン）といふ通信手段の性格から日常的にネット・モナドが直面してゐる事象・現象の監視・調査項目として、「近代国家構造模型図」に拠り、次の項目を得

ることができる。ダウンロードは：https://docdro.id/IyWxSi5



上図から解る、国家権力が管理し、他方メディアが監視および調査対象とする項目は次のやうになります。

（１）第二層：MEDIA２の監視・調査項目：これは国家権力による権力行使の階層

①検閲
②知識・情報の体系
③通貨価値（経済）
④外交（軍事を含む）
⑤MEDIA２：権力２の有するメディア性そのものが監視・調査の対象となる。そのやうなネット・メディアによる対象となつたMEDIA２をmedia２と表記することができる。これは、メディア同士の牽制機能を働かせるといふことですし、実際にネット・メディアの個衆（personals）のmobileは世界中で此の役割を果たしてゐる。

この層では、マス・メディアとネット・メディアAが共存してゐる。従ひ、後者にあつては、個人（personal）または個衆（personals）が、mobile片手に、検閲、メディア２（ネット・メディアから見るとマス・メディアになる）、通貨価値、および外交（軍事

を含む）を監視または調査することになります。

これらの項目に関する国家自体のまたは国家の関与する組織および施設が、ネット・メディアの監視・調査対象になるといふことです。この構図は後述する公共とは何か、私（プライヴァシー）とは何かという事の基本的な枠組みになつてゐます。

これが、ネット・モナドのすることであるし、できることである。物事の順序は、できるので、することになるし、するといふ順序です。このためにSNSがある。

以上に対して、国家権力も同じ項目を監視し調査する。

（２）第三層：MEDIA３の監視・調査項目：これは国家権力による権力実行の階層

①刑務所
②売春施設
③金融機関
④監視機関
⑤MEDIA３（media３）：権力３の有するメディア性そのものが監視・調査の対象となる。そのやうなネット・メディアによる対象となつたMEDIA３をmedia３と表記することができる。これは、メディア同士の牽制機能を働かせるといふことですし、実際にネット・メディアの個衆（personals）のmobileは世界中で此の役割を果たしてゐる。

この層では、1日単位の時間で仕事をするマス・メディアは、上掲図中の「ネット・メディアの平面B」にあるmobile（スマホ）には敵（かな）はないので、後者の一人勝ちの、ネット・メディアに非常に優位性のある舞台です。従ひ、後者にあつては、個人（personal）または個衆（personals）が、mobile片手に、刑務所/犯罪行為、売春施設、金融機関、および監視機関を監視または調査することになります。

これらの項目に関する国家自体のまたは国家の関与する組織および施設が、ネット・メディアの監視・調査対象になるといふことです。この構図は後述する公共とは何か、私（プライヴァシー）とは何かという事の基本的な枠組みになつてゐます。

これが、ネット・モナドのすることであるし、できることである。物事の順序は、できるので、することになるし、するといふ順序です。SNS提供者によるネット上の検閲の問題は別に論ずるとして、このためにSNSを含めてネット・メディアがあると考へる。

以上に対して、国家権力も同じ項目を監視し調査する。

このやうに見て来ると、第３層は、安部公房の読者ならば、これは都市の層であり、都市論の平面だといふことができます。『燃えつきた地図』の世界です。安部公房は二つのアメリカ論を書いてゐて、一つは『アメリカ発見』、もう一つは『モスクワとニューヨーク』といふ題名の評論です。

これらの評論は今も生きてゐる。特に後者は２１世紀の今ならば、その最初に述べてゐる結論、即ち「結論を先に言ってしまうと、モスクワのなかに、むしろアメリカ的なものを、ニューヨークの中に、むしろソ連的なものを認め、何やらひどく割り切れない、混乱におとしいれられてしまったのである。」と書いてゐるところを其のまま今に転じては「北京のなかに、むしろアメリカ的なものを、ニューヨークの中に、むしろ北京的（中国共産党的）なものを認め、何やらひどく割り切れない、混乱におとしいれられてしまったのである。」と書いて論を始めることになるでせう。安部公房の明察や鋭し。現下に米中戦争といふ片や本物のマルクス主義による共産主義国家（中華民国）、片や民主主義と自由を標榜しながらも此れがイデオロギーになつて海外に覇を唱へるといふ贋共産主義国家（アメリカ合衆国）の敵対と云ふことになれば、今も安部公房の現地訪問の後に書かれた此の観察は生きてゐるのです。

この作家の評論の最後の締めの言葉は、しかし、「この二つの大都会の顔は、おそらくはあすの東京の顔でもあるのだろう。いずれ、この東京という都市に、正面から挑戦するような作品を書いてみたいと思っている。」とあつて、これが１９６４年の１２月の文章ですから、東京といふ此れも大都会を変形させて存在論として書いた傑作『燃えつきた地図』が刊行されるのは三年後の１９６７年です。

しかし、「この二つの大都会の顔は、おそらくはあすの東京の顔でもあるのだろう。」と云ふ安部公房の此の予言を外す努力を私たちはしなければならないと、私は安部公房の読者であることを裏切つて考へるものであるが、あなたは此の問ひに如何に答へるか。超越論でお考へ下さい。と、かうなれば、禅問答の公案と変はらない。即ち、

「什麼三（そもさん）、北京とNYの大都会の顔は、明日の東京の顔であるか？」

隠喩（メタファ）で考へるならば大都会にも人相があるだらうといふことです。

一寸ふざけ過ぎてゐるといふことは重々承知で、たとへば、中華料理の北京ダックとドナルド・ダックは似てゐるとか、さう云へば、ドナルドといふ名前の立体商標を店頭に立てたマクドナルドは北京の街角のあちこちにあるなとか、さう云へば、東京にも……。北京がアメリカ化されたのだらうか？否、さうではなくて、NYが中華化されたので米中戦争が第三次世界大戦の一部として最初に始まつたのだ。と云ふ風に都市論として考へては如何か。

「什麼三（そもさん）、北京と東京の大都会の顔は、今日の北京の顔であるか？」

さて、このやうな情勢下、状況下にあつて、ネット・モナドたるあなたは、２０世紀ならばマス・メディア内に生息するジャーナリストの役割を全く新しい平面上で遂行することになつたといふのが、この論考の主題の一つです。そのためにあなたの要求されてゐる能力についても既述の通り。都市論の視点で、この平面（第三層）を眺めれば、この平面上で、あなたは東京ー北京ーNYといふ都市間にゐてジャーナリスト相当の働きを無意識にしてゐるといふことになります。勿論、これにロンドンやベルリンやパリやモスクワを加へることができます。最近ではあなたのmobile画面にアラビア文字が登場しても可笑しくはない。

都市間ネットワークが国家間ネットワークに重複するかはみ出すかするやうにして存在してゐるといふことです。安部公房の都市論『都市への回路』の中で語る都市論は依然として有効であり、この都市の回路、即ち都市のネットワークの中ではユダヤ人問題も語られてゐます。この安部公房の先見の明は、メディア論とともにもつと読者によつて論ぜられるべき安部公房文学の未開拓の領域です。読者の論考に期待します。

以上散文的に、些（いささ）か機械論理的に、「近代国家構造模型図」から読み取ることのできる第二層と第三層の監視・調査項目について述べましたが、後でまたこの二つの層に戻つて、これらの項目との関係を現実的に具体的に吟味することがきつとあることでせう。

４.６　Topologyで右翼と左翼の関係を明確にする

私たちがいつもよく理解できないことの一つは、政治的な主題に関して、そして場合によつては政治的な影響力の及ぶ限りでの経済的な政策への評価についての、国内と国際とを問はずに、右翼と左翼の関係です。関係する定義を再掲します。その上で私たちの古代以来遺伝子に内蔵されてゐるtopology（数学）と超越論（哲学）によつて此の問題を解ひてみませう。以下もぐら通信第１０５号より各種定義を引用して一覧した上で此の章の本題に入りたい。

以下に定義の後に掲げる図「Topologyで右翼と左翼を考へる」には、日本のオメデタイお笑ひ国会と恐るべき鈍感マス・メディア以外では近時問題の香港の擾乱を例にとりました。同じであるとは何か？言葉の意味を辞書を引いて考へよう。それぞれの内部と外部で、それぞれの外部と内部が正反対であり、価値の転倒があり、従ひあらゆる立場の代表する意義の転倒があり、場合によつては倒錯してゐるとまづ疑ひ、考へるべきことだといふことをよくお考へ頂きたい。外国での価値を日本国内で其のまま通用すると勘違ひして価値を是認し、これを国家以下国民が執行・行使・実行しようとすると、国内では価値の倒錯が起きるといふことを深く考へよといふことです。一体お前はどこでこ

んなことを学んだのだ？と問はれれば、知らざあ言つて聞かせやせう、あなたと同じに行けといはれて何故かも分からず嫌々通つた義務教育の学校の英語の授業で教はつたではないか。I am a boyとは、私は少年か？おいらはガキだ、は、I am a boyか？ところで不定冠詞のAはどうするのだA？

左翼の定義
左翼とは、相場と市場を否定するものの考へ方であつて、且つ政治的・経済的・文化的な問題の根源的な解決と解決法を外国の伝統と文化および宗教に求め、同時に外国の勢力と結託してまでして此れを実現しようと考へ行動する個人もしくは組織のことである。

右翼の定義
右翼とは、相場と市場を否定しないものの考へ方であつて、且つ政治的・経済的・文化的な問題の根源的な解決と解決法を自国の伝統と文化および宗教に求める考へ方、または其のやうに考へる個人もしくは組織のことである。

極左の定義
極左とは、左翼を極端にしたものを云ひ、相場と市場を否定するものの考へ方であつて、且つ政治的・経済的・文化的な問題の解決と解決法を専ら外国の伝統と文化および宗教に求め、同時に外国の勢力と結託してまでして此れを暴力を用ひて実現しようと考へ行動する個人もしくは組織のことである。左翼の延長に生まれる全体主義・ファシズムのことである。

暴力の定義
暴力とは、国家構造模型図［https://docdro.id/G4YcHH9］の三つの階層に亘り、権力１から３が執行し（第１層）、行使し（第２層）または実行する（第３層）力のことである。この図に従ひ、次の暴力の分類を得る。

分類１（暴力自体視点）
（１）戦争による暴力（世界各地で起きてゐる地域的な戦争是也）
（２）軍隊による暴力（中国共産党によるウイグル人や香港の弾圧、尖閣諸島への不法なる侵犯是也）
（３）警察による暴力（中国共産党によるウイグル人や香港の弾圧、尖閣諸島への不法なる侵犯是也）

分類２（言語視点）
（１）言語による暴力（中国共産党によるウイグル人の弾圧是也）
（２）言葉による暴力（LGBTなどのpolitical correctness是也）

（３）法律による暴力（ヘイトスピーチ法、改正入管法（移民法）、LGBTなどのpolitical correctness是也）

分類３（貨幣視点）
（１）金融による暴力（グローバリズムといふ名の国際金融資本・中国共産党の一帯一路是也）
（２）通貨による暴力（グローバリズムといふ名の国際金融資本・中国共産党の一帯一路是也）　（３）市場による暴力（グローバリズムといふ名の国際金融資本・中国共産党の一帯一路是也）

分類４（イデア視点）
（１）思想による暴力（イデオロギー）
（２）メディアによる暴力（検閲とプロパガンダ）
（３）性愛による暴力（強姦）

これらの分類を眺めれば、国家の本性を取り戻してインポテンツ状態から恢復するために日本の国家が積極的に振るふべき、即ち執行すべきは、国内外に渉（わた）る合法的な暴力（Gewalt：ゲヴァルト）である。

極右の定義
極右とは、右翼を極端にしたものを云ひ、相場と市場を否定するものの考へ方であつて、且つ政治的・経済的・文化的な問題の解決と解決法を専ら自国の伝統と文化および宗教にのみ求め、これを暴力を用ひて行はうと考へ行動する個人もしくは組織のことである。右翼の延長に生まれる全体主義・ファシズムのことである。

全体主義・ファシズムの定義
全体主義・ファシズムとは、極右または極左の別称である。

全体主義の定義
全体主義とは、国家の定義１および２に定義される国家の弱点を突いて、個人独裁、企業独裁または特定の政党独裁（以上を総称して「独裁者」と呼ぶ）の実現およびこれらの独裁による政治および経済の経営と運営を目的とし、あるひは独裁者が人・物・事に強い影響力を行使することによつてこれらの目的のために生まれる一極集中型中央集権絶対専制主義である。

ファシズムの定義
ファシズムとは、国民国家（nation）を、そして往々にして人種を、個人の上位に置いて讃美し、そして独裁的指導者と、厳格な経済統制と社会統制および反対意見を暴力的

に（forcible）抑圧することを専らに行ふ中央集権化した個人独裁を支持する、（イタリアのムッソリーニが１９２２年から１９４３年までファシズムの原則（the principles of fascism）によつて統治したやうなあの）ファシストの政治的哲学、運動または政治体制である。「ファシズムの原則」については別途論ずる。

［補足説明］
Webster Onlineの引用：（略）

国家の定義１（安部公房の定義）
国家とは、人間の持つ言語の二つの機能、即ち集団化機能と分化機能（個別化機能）のうち、前者の機能を最大限に発揮させることによつて、直接顔を合はせることのない成員をまで組織して是を巨大化し抽象化して生み出した人間の組織の最大のものである。
（『シャーマンは祖国を歌う』全集第２８巻、２３５ページ下段）

国家の定義２（筆者の定義）
国家とは、「近代国家構造模型図」の示す通りに権力の三階層よりなる人間の組織であつて、貨幣・言語・暴力・エロス（憧れ）からなる、其の地域に生活する人間の最大の組織単位である。

［補足説明］ それでは、nationと呼ばれる国家は何か、stateといふ国家とは何処が違ふのかといへば、 以下にWebster Onlineの定義を引用したやうに、nationとは「共通する起源、伝統および言語を有し、そして一つのnation-stateを形成しまたは現実に構成する能力を有する people(国民、民族)である」ものをnationといふのでありますから、nationとは国民であり民族のことです。 これに対して、stateといふ国家は、peopleが政治的に組織した体 (body)、即ち peopleの集合した体(てい又はたい)であるといふことです。

従ひ、nation-stateならば語法上の問題はない。何故なら、このやうな 国民国家足り得るからです。Webster Onlineから当該の定義を引用します:（略）

さて、以上の定義を通覧した上で、組織（これの最大のものである国家を含み其）の内部・外部と右翼・左翼の等価交換関係について作図をしましたので、これをご覧下さい。私たちはいつもここで、即ち内部と外部、それに右と左の関係を１：１で固定して考へるがためにお互ひに誤解をし判断を誤ることが多かつたのです。ネットの時代ですから、そんな時代遅れの理屈はさつさと捨てて、１：NまたはN：１またはN：Nの関係でものを考へることです。アリストテレスの論理学の限界を時代は超え、従ひ、イエス・キリストの教へは不滅であれども、教義の正当化のために其の論理学に頼つたキリスト教会もまた衰退してゐる。

月読命　右眼　左眼

天照大御神

Topologyで右翼と左翼を考へる

八咫鏡

一般論

この図をみると、天照大御神自身であるとして瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）に授けられた八咫鏡に写る位相を月読命であるあなた（ネット・モナド）が読んでゐるといふことが判る。このネット・モナド論は１７世紀のライプニッツの汎神論的存在論を古事記の世界に生かし今に生かした私たちの古代からの超越論的存在論（汎神論的存在論）になつてゐるといふこともまた判る。

鏡に写して考へてみよう
（写像で考へてみよう）

個別論

この機械論理的な等価交換に加へて、各国の特性を考慮にいれて右翼左翼を判別する必要があることに注意。しかしこのやうに考へることができれば、素人でも玄人はだしのネット・メディア・ジャーナリストになることができる筈です。能力要件については本文で既述の通り（第１０９号参照のこと）

中国共産党（本物の共産主義国家）であるならば、アメリカ（贋物の共産主義国家）の手口と同様に、他国の国内の右翼左翼を問はずに賄賂と色仕掛けで政治家経済人文化人メディアを籠絡し、その国を衰退させて支配下に置かうとするだらう。

現実は此の通りになつてゐる。即ち、中国共産党の支持政党が自由民主党といふ名前の極左・共産主義政党として保守党を右の位置にゐて名乗り、個別の野党政党（極左・左翼・共産主義政党）の位置は香港にあつては右の位置にある反中国共産党の市民および代表的活動家を支持すべき位置にゐる政党として、自由と民主主義を訴求して支援するべき立場に本来はある（のに一言もその言葉を発しない）。　何故、本来こそは発言すべき反共産党の声明が出せないかといふ理由は左記の手口の通りである

と巷間言はれてゐる。

２０世紀のマルク主義国家がアフリカ諸国では民族主義であつたことの理由を考へること。事情は先の敗戦後の日本の共産主義者たちにあつても同様だと私は考へる。民族特性、国民特性、国家特性を考慮すれば、資本主義による貧富の格差の大きさの問題の解決を政治的に図らうとして、上記のやうに考へずに盲目的にマルクス主義を信じて左翼・共産主義者になれば、それは盲目的に民族主義者になるのと本来は変はらないし、敗戦直後の共産主義者たちも共産党も、また１９６８年の全共闘・全学連の学生たちも同様であつた。しかしこれら共産主義者の問題は道徳を放擲して、暴力によつて問題を解決しようといふ所にあるから、これは極左の定義にある通りの極左・共産主義者であることが共産主義者の本来の姿である以上、これは手段を内外に求めるといふ考へを除けば、国内極右と同じ論理で政治と経済を考へてゐるといふことになり、従ひ、資本主義と裏表である民主主義を肯定する共産主義者は、主張が根底から矛盾してゐて可笑しいといふことです。

しかし、この手合ひを日本ではカタカナでリベラルと呼んでゐる。Liberalが日本には知能（intelligence：知性）の点で一人もゐない理由、カタカナでのリベラルでも同様の理由で日本にはゐないことは既述の通りですが、今の世の日本語の乱れは治世（知性）の乱れであることを憂ひて定義を再掲します。

リベラルの定義

リベラルとは、leberal arts（自由７科）に関し、特に初等論理学の知識は最低でも持つてゐ て、その上で、自国内の問題を、極左の立場ではなく、左翼の立場で、自由な競争を前提に、 またアメリカ人の定義する「自由主義の原則」を遵守し国内に自由を実現するために日本人に合ふやうに変形し（以上日本人のために）、他方社会的な不平等に対しても同様に、人類と個人の判断の自由と自律性を大切にして（以上人類のために）、問題の解決を図らうといふ個人または組織である。「自由主義の原則」については別途論ずる。

［補足説明］

Webster Onlineを見ると、其の語源から、またその後の歴史的な用例の展開から言つても、 日本には英文字で呼べるliberalはそもそも存在しない。日本はプロテスタントの国ではな い。あるとすればカタカナのリベラルであるが、これをできるだけ英語の字義に近づけて解釈しても、日本のカタカナ・リベラルにはthe principles of liberalism（「自由主義の原則」） がないし、またliberal artsに関する知識と教養のある人間はゐないし、BROAD-MINDED （度量の広い人）でも全然ないので、カタカナ表記でも、情けない話であるが、その器と知能の程度から言つても、我が国にliberalもリベラルもとてもあり得ないのである。せいぜい が初等論理学の知識があればカタカナ・リベラルと呼んでやつても良いといふ程度のお情けの定義である。

従ひ、日本の国に（左翼、リベラル）といふ組み合わせは、そもそも、存在しない。［アメリカ人ならばいいだらう。リベラルの言葉だけを日本に盲信的に入れて自称すれば上掲の図の通りの理由により無残な姿となる。］リベラル単独でのリベラルはあるかも知れないが、この「あるかも知れない」リベラルは、世相の用語法を観れば、実際には色々な思ひ付きの名前で好き勝手に呼ばれてゐる。従ひ「あるか も知れない」リベラルは「好き勝手に呼ばれたい」リベラルである。

以下関係して定義をするために御世話になつたWebster Onlineからの引用をして補足する。 赤字は特に定義をするために必要とした文言です。：（略）

さて、こんな程度のトホホの我が国であるが、次章にて象徴とsymboleの補足的説明をしてから、メディアとしての三種の神器を言語（日本語）の観点から共通概念を抽出して

一言で言ひ、私たちのカミ（神といふ漢字を当てがつてゐるカミといふ概念即ち言霊）とは何かを述べて、現世（うつしよ）の、浮世の、毎度お騒がせの、ネット上でも検閲の問題と表現の自由の問題との関係でも混乱甚だしい主題の一つである公私とは何かを論じて、頭と心の整理をしたい。この章では「近代国家構造模型図」を元に第二層と第三層の平面上で水平方向に複数の主題を展開して思考しましたが、次章では垂直方向に思考を上昇させようといふことです。

この論じ方は、政治のみならず、また海外思想（経済学の思潮を含む）を正しく理解し、更に海外からの宗教に関しても同様に正しく考へることに有効です。正しく考へるとは、上記の通り、topologicalに内部と外部の価値を等価交換して（平俗に云へば立場を入れ替へて、相手の立場に立つて）均衡（バランス）よく考へるといふことです。例を宗教から挙げると、先日来日したローマ教皇が長崎へ赴いて当時豊臣秀吉の処刑した２６人の日本人の殉教者のために祈つたといふ行為も、国内から見れば、これは当時のカソリック教会のうちのイエズス会の宣教師が日本人の男女を奴隷にして海外に売り飛ばして（私の読んだ驚いて記憶した資料には７０万人と書いてあつたが）金を稼いでゐたといふ非道の行為をおこなつてゐたからで、最初にヨーロッパに行つた日本人が日本人の奴隷であつたとは、今からみても当時に於いて見ても豊臣秀吉の政治的判断は正しい。九州のキリシタン大名といはれて教科書で教はつた大名たちも同様の振る舞ひに及び、自分の領民を海外に奴隷にして売り飛ばしたのであれば、徳川幕府は海外に追放して帰国を禁じたといふ記述も納得できるのである。しかし、何故か日本の学校では歴史的事実は教へられない。今はどうなのであらうか、教へられてゐるのか？海外の正義は内国の不正義、内国の正義は海外の不正義である。と、まづバランスよく、そして安部公房が都市論としてユダヤ人問題を論じたやうに（『内なる辺境』）topologicalに、考へることです。生きるために私たちが均衡（バランス）をとることを必要とするのであれば、やはり言語によつて言葉を実際に口で発声して主張をしなければいけない。沈黙は藝術にあつては金であるが、生活にあつては人間ならば木偶の坊であると思はれるし、海外、殊に大陸では、本当に実際に言葉で言はねば馬鹿だと思はれ軽蔑されるか無視されるのである。あなたが外国語に憧れるといふことは、このやうな苛酷な（と日本国内にゐることと比較すると思ふことにならざるを得ない）現実を受け容れるといふことである。その目的のために小学生から英語を日本の子供に学ばせるのではないのか？まさか、外国人と仲良く、ましてや友達になるためになどと云ふ馬鹿な目的が文部科学省が教師に配付し指示する指導要領に書いてあるのではあるまいな？もしそんなことを指導要領に書かせた文科省の役人がゐたら、まづ本人を大陸のどこの町でも良いから、研修の名目で、一銭の金も持たせず（血税をこんな輩に持たせるわけにはいかない）、裸一貫で放り出して生活させたら良いのである。さうすれば此の教育省の役人の外国語能力は短日時に確実に上達するだらう。生きるといふ目的が明確であるのだから。

もう一つドイツの例を挙げれば、ドイツ国内にあるネオ・ネチ勢力が反対し否定してゐるのはEUである。とすれば、前者を極右とマス・メディアが呼ぶのである以上、後者はマス・メディアも含めてEUを支持するならば極左・共産主義であり、実際に行ってゐることはさうである。この延長で保守的な政党までもがEUからEXITしようといふことであれば極右とマス・メディアによつて呼ばれることになつてゐるわけです。日本にあつては如何？

縄文紀元論
Topologyで日本人を読み解く（４）
２。日本語の音義と概念の関係：五十音表とは何か

目次

Ⅰ 縄文紀元日本語論
１。日本語と漢語の関係
（１）言葉と概念と文字の関係
（２）音義と日本語の概念の関係
（３）漢字とひらかな・カタカナの関係
（４）音義と五十音表の関係
（５）有文字文明と無文字文明

Intermezzo：何故日本にはキリスト教徒が全人口の１％しかゐないのか？

２。日本語の音義と概念の関係：五十音表とは何か
３。文字についての禁忌（タブー）
４。ひらかなとは何か
５。カタカナとは何か
６。ひらかなとカタカナの使ひわけの規準（クライテリア）
７。五十音表は何故どのやうに生まれたか
８。和漢混淆文とは何か

Ⅱ《わたし》とは何か、《わたし》は何処にゐるか
１。安部公房固有の話法「僕の中の「僕」」について
２。海外の数学者の認識する扇といふ名前のtopologyの実例
３。《わたし》は何処にゐるか
４。《わたし》は、宇摩志葦牙比古遲（うましあしかびひこぢ）の神である
５。宇摩志葦牙比古遲神とは何か
６。超越論のおさらひ
７。超越論で伊勢物語を読む
８。みやびとは何か：みやびの概念
９。現代にみやびの概念を適用する

Ⅲ 超越論とtopologyの関係：全ての道は高天原に通ず
１。日本民族の哲学と数学
２。神道とは何か

Ⅳ Topologyで縄文土器を読み解く
１。紋様とは何か
２。縄文土器の構成要素
３。縄紋は縄目と渦巻き紋様で出来てゐる
４。縄文土器は三階層で出来てゐる
５。縄文土器には開口土器と閉口土器の二種類がある
６。縄文土器は私たちの宇宙観を体現してゐる
７。メディア（媒体）としての縄文土器
８。弥生式土器は二階層で出来てゐる
９。メディア（媒体）としての弥生式土器
１０。縄文土器と弥生式土器の関係（topologicalな連続性）：３（奇数）から２（偶数）へ
１１。銅鐸は７階層で出来てゐる
１２。縄文土器の政治と弥生式土器の政治：土器と政治の一体と分離：銅鐸とは何か１
１３。縄文土器の経済と弥生式土器の経済：土器と経済の一体と分離：銅鐸とは何か２

Ⅳ ２１世紀の現代に縄文土器はどのやうに生きてゐるか
Ⅶ 二十世紀の幕を閉ぢ、２１世紀に生きるための結語

青字は既論の章、赤字は今回論ずる章、黒字は此れから論じる章

２。日本語の音義と概念の関係：五十音表とは何か

五十音表とは何か？といふ掲題の問ひ答へます。これが五十音表です。

わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ
ゐ	り	い	み	ひ	に	ち	し	き	い
う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う
ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え
を	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お
ん									

この表には、日本語の全ての音がマトリクス（matrix）になつて配置されてゐる。マトリクスとは、列（カラム）と行（ロー）に、それぞれ垂直方向には、あいうえお以下縦に読み下して立てる１０の列の並びを云ひ、水平方向には、あかさたなはまやらわ以下、５段に重ねて横に読む並びを云ふ。１０の列と５の行との交差したセル（cell）に一音一音が平仮名で書かれてゐる。全部で、１０x５＋１（ん）＝５１の音がある。

日本語は一音一義である。この音の意味を音義といひます。即ち一つの音に一つの意味、即ち音義があるので、日本語は全部で５１の音の意味、即ち５１の音義からなる言語だといふことになります。

これはマトリクスのセルである以上、一つ一つのセルにある音同士には、垂直と水平の方向に於いて、論理的な、発音と音義に関する連絡の関係があるといふことになります。即ち、一語一音一義と其の連絡関係、接続関係があるのです。これが日本語の特徴であり、特性であり、特色であり、本質です。私たちの言葉の根本的な性格です。このマトリクスの盤上で、文法的にも音声学的にも規則正しい変化をして、私たちの口から音が発声せられ、私たちは生きてゐる。

この五十音表がマトリクスであるといふことからわかるやうに、日本語は実に数理的な、もつとはつきりと云へば文法学的にもトポロジー言語です。何故なら、日本語では一見二義的・二次的に見える助詞（てにをは）や助動詞が、それぞれ名詞と動詞に附属するやうに置かれて、実は名詞ならば其の格を、動詞ならば其の活用を支配してゐるからです。支配とは何か？ですが、発話者または主語に置かれた名詞が主語以外の文の要素のまとまり（述語部）の動詞の時間を統制するといふことです。本居宣長も時枝文法も、これを詞と辞と云ふ分類で説明しましたが、これは正しい。辞が二義的・二次的位置を占める品詞であり、詞は一義的・一次的位置を占める品詞である。前者は玉の緒であり、後者が玉である。これはこのまま私たちの言霊（コトのタマ）観と云ふ、数学者

ならば相補的（complimentary）と云ふ相互補完的な関係に一致してゐます。私たちの日常の言葉でいへば役割分担、即ち機能（働き）と云ふことです。これは、そのまま話法（mode：モード）の問題です。詳細は機会があれば後述します。

この五十音表がマトリクスであると云ふ問題は、このまま安部公房の日本語クレオール語論に直結してゐます。ですから、この五十音表は機能表なのです。言の葉の、即ち事の葉の相互補完的な役割分担表なのです。この接続と変形の姿形、形と力を、私たちはコトタマと呼び、言霊と借字してゐる。

もう一つ、このこの五十音表で云ふべきことは、やはり私たち日本人のtopologyの能力です。この機能表の一文字一文字を一音義一音義の接続と変形によつて、いろは歌をつくつたと云ふことです。これは５０の音声を一筆書きで表した、即ち上位接続（conjunction）によつて変形（transform）させて統合した（integration）と云ふことだからです。日本人は既にこの当時、今様の言葉で云ふsystemといふ概念もアルゴリズムと云ふものが何かも理解してゐるといふことです。「七五調の歌謡である今様の形式で、仮名を重複させることなく作られている。」［註１］と云ふことは、重複なくとは切れ目がなく一筆書きで連続してゐると云ふ意味です。

［註１］
https://ja.wikipedia.org/wiki/いろは歌

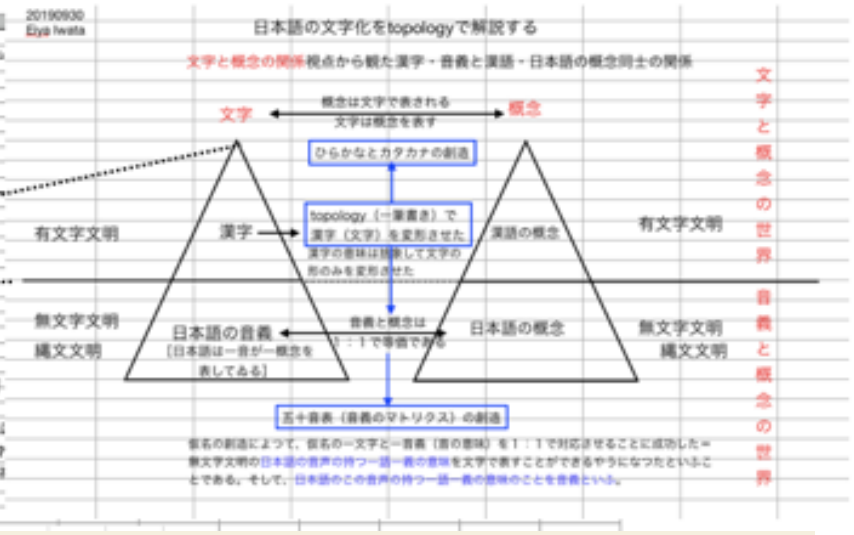
いろはにほへど　ちりぬるを　わがよたれぞ　つねならむ　うゐのおくやま　けふこえて　あさきゆめみし　ゑひもせず……【A】

色は匂へど　散りぬるを　我が世誰ぞ　常ならむ　有為の奥山　今日越えて　浅き夢見し　酔ひもせず……【B】

【A】は漢字の輸入に当たつて穢れを祓つた後に生まれたひらかな、【B】は穢れを祓つた後に使つてよしとした漢字を交へた和漢混淆文。後者に同様に穢れを祓つた後に生まれたカタカナを加へて三種の文字を和漢混交文と読んでゐる。外来語は皆カタカナ表記をすると云ふことが、日本人の智恵です。これがどんな深い意味が高天原のtopologyと神々の在り方（哲学用語で云ふ存在の概念）に直通してゐるかは、カタカナとひらかなのどちらが先に生まれたかと云ふ章で後述します。

文字論の視点で、上記【A】【B】の順序を考へると、【A】の音の層の上に【B】の文字の層が和漢混淆文と呼ばれて載つてゐると云ふことになります。

音声と音義と文字の階層図を再掲しますので、ご覧下さい。



私が五十音表と云ふmatrixに一章を割いたには理由があります。日本語が一音一語一義であると云ふ理解は、林武著『国語の建設』に学んだものです。この方は洋画家として名をなし一流を築きましたが、元々林家は代々国学者の家系であり、父は林甕臣（みかをみ）、祖父は甕雄（みかを）、曽祖父は圀雄（くにを）といひ、「この圀雄は、江戸時代の国学者の中で、数人の中にはひる学者であつた。それは、国学者伝記集成を見ると分かるが、現代の国語を学ぶ者にも、圀雄の名は出てくる。

圀雄は、江戸時代の本居宣長のあとを受け、刻苦勉励してその正統を継ぎ、宣長の高弟と言はれてゐる。また平田篤胤などと深い関係の学者で、とくに言霊学をよくした。」と同書第一章「アーネスト・サトウとの親交」にはあります。「因みに最近圀雄の『皇国（みくに）の言霊』と『詞の緒環』と甕臣の『語学教授書』とふのが日比谷図書館で特別買ひ上げとなつたのを知らせてくれた人がある。」とありますから、今も日比谷図書館に蔵書としてあり、閲覧できるものと思はれます。

『国語の建設』は、林武が父甕臣の先の戦争後の政府と御用学者による日本語に加へた現代かなづかひと云ふ名前での不合理で非論理的な「国語破壊」に憤り、正しいものを教へるのが教育であると云ふ父の遺志を世に知らしめんとして、甕臣が晩年にそれまでの集大成として著した『日本語原学』の内容を分かり易く伝へたものです。同じ頃に福田恒存が同様に反対の論陣を張つて後に『私の国語教室』を著した機運と軌をいつにして世に出た著作の一つです。

安部公房の読者としては、安部公房の存在の師石川淳が終生正字正仮名で文章を書いたことはご存じでせう。この石川淳の言葉を林武は引用してゐます：

「また五十音を尊重することも大事である。作家の石川淳さんも五十音図の大切なことを書いてゐる。石川さんは、五十音図といふものは、ただ仮名を一覧表につくったといふものではなく、これによつて日本語の動詞の活用、形容詞の副詞への変化、それらと名詞のつながり、語根、語尾の変化、音便などについて、つまり日本語の構成一般についての基本的知識を整理することができると言つてゐる。僕もその通りだと思ふ。

　語原と五十音を尊重すれば、国語といふものは揺れない。さうなれば、文化といふものが非常に安定して、創作なども古典につながり、そして未来にも同じ精神が同じやうに伝はる。つまり、人間の心といふものが、断絶することなく伝へられ、進歩して行くことになるわけである。」
（同書第三章中「伝統にかへる」の節、２０２ページ）

この著作によれば、父林甕臣が明治の御世になつて文明開化の過ぎたるが余りに、国学者の立場から日本語を護らんが為に学者としては苦手な筈の政治的な領域に踏み込んでまでして東奔西走と私の読める実務的な活動をして、一家は貧窮のために林武の長兄他姉たちも遠くへ離散したといふことが一行二行で事実のみが書かれてゐます。大変な苦しみであつた筈ですが、辛酸を舐めたとか苦労をしたとかは一言も書いてゐない。これが日本人のこころだと思ひます。この父祖の苦労と此の洋画家になつた林武の苦心苦労を何とか２１世紀に生かしたい。この『国語の建設』は、何故か、私の国内外の幾度もの転居にも拘らず、常に手元にある貧しい幾冊かの書物のうちの常に一冊でありました。この本を購つてほぼ半世紀が過ぎた。

私がPC上での変換の困難である理由から漢字は別としても、正仮名で書いてゐる理由を良い機会ですから此処で申し述べますと、高校生の頃に学校で教はる授業は少しも面白くないので、帰宅後夜になつて深更を経、朝方の明るみが窓に射すまで、何故か知りませんが非常に惹かれたものでありませう、一心不乱に平安朝の古典文学を読み耽つてゐるうちに自然とひらかなも古典的なひらかな使ひを致しますと「人間の心といふものが、断絶することなく伝へられ」て我が身内に生き生きと実感としてあることを覚えて、それ以来のことであるのです。即ち、平安時代が私に生きてゐるのです。ここではこの経験について話をすると、これも尽きないので（この経験が外国語を実感として生き生きと理解するのにどれほど役に立つたことか）、多言を弄することは控へて本題を次に進めたい。

このやうな数奇な経路で、１８世紀の本居宣長の国学の（今でいふなら）トポロジー日本語論も全く新しい意匠のもとに本質は変はらずに、私の文章に生きてゐるといふわけなのです。

３。文字についての禁忌（タブー）

（以下次号）

連載物・単発物次回以降予定一覧

（１）安部淺吉のエッセイ
（２）もぐら感覚２３：概念の古塔と問題下降
（３）存在の中での師、石川淳
（４）安部公房と成城高等学校（連載第８回）：成城高等学校の教授たち
（５）存在とは何か〜安部公房をより良く理解するために〜（連載第５回）：安部公房の汎神論的存在論
（６）安部公房文学サーカス論
（７）リルケの『形象詩集』を読む（連載第１５回）：『殉教の女たち』
（８）奉天の窓から日本の文化を眺める（６）：折り紙
（９）言葉の眼１２
（１０）安部公房の読者のための村上春樹論（下）
（１１）安部公房と寺山修司を論ずるための素描（４）
（１２）安部公房の作品論（作品別の論考）
（１３）安部公房のエッセイを読む（１）
（１４）安部公房の生け花論
（１５）奉天の窓から葛飾北斎の絵を眺める
（１６）安部公房の象徴学：「新象徴主義哲学」（「再帰哲学」）入門
（１７）安部公房の論理学〜冒頭共有と結末共有の論理について〜
（１８）バロックとは何か〜安部公房をより良くより深く理解するために〜
（１９）詩集『没我の地平』と詩集『無名詩集』〜安部公房の定立した問題とは何か〜＊
（２０）安部公房の詩を読む
（２１）「問題下降」論と新象徴主義哲学
（２２）安部公房の書簡を読む
（２３）安部公房の食卓
（２４）安部公房の存在の部屋とライプニッツのモナド論：窓のある部屋と窓のない部屋
（２５）安部公房の女性の読者のための超越論
（２６）安部公房全集未収録作品
（２７）安部公房と本居宣長の言語機能論
（２８）安部公房と源氏物語の物語論：仮説設定の文学
（２９）安部公房と近松門左衛門：安部公房と浄瑠璃の道行き
（３０）安部公房と古代の神々：伊弉冊伊弉諾の神と大国主命
（３１）安部公房と世阿弥の演技論：ニュートラルといふ概念と『花鏡』の演技論
（３２）リルケの『オルフェウスへのソネット』を読む
（３３）言語の再帰性とは何か〜安部公房をよりよく理解するために〜
（３４）安部公房のハイデッガー理解はどのやうなものか
（３５）安部公房のニーチェ理解はどのやうなものか
（３６）安部公房のマルクス主義理解はどのやうなものか
（３７）『さまざまな父』論〜何故父は「さまざま」なのか〜
（３８）『箱男』論 II：『箱男』をtopologyで解読する
（３９）安部公房の超越論で禅の公案集『無門関』を解く
（４０）語学が苦手だと自称し公言する安部公房が何故わざわざ翻訳したのか？：『写真屋と哲学者』と『ダム・ウエィター』
（４１）安部公房がリルケに学んだ「空白の論理」の日本語と日本文化上の意義について：大国主命や源氏物語の雲隠の巻または隠れるといふことについて
（４２）安部公房の超越論
（４３）安部公房とバロック哲学
①安部公房とデカルト：cogito ergo sum
②安部公房とライプニッツ：汎神論的存在論
③安部公房とジャック・デリダ：郵便的（postal）意思疎通と差異
④安部公房とジル・ドゥルーズ：襞といふ差異
⑤安部公房とハラルド・ヴァインリッヒ：バロックの話法
（４４）安部公房と高橋虫麻呂：偏奇な二人（strangers in the night）
（４５）安部公房とバロック文学
（４６）安部公房の記号論：《 》〈 〉（ ）〔 〕「 」『 』「……」
（４７）安部公房とパスカル・キニャール：二十世紀のバロック小説（１）
（４８）安部公房とロブ＝グリエ：二十世紀のバロック小説（２）

（４９）『密会』論
（５０）安部公房とSF/FSと房公部安：SF文学バロック論
（５１）『方舟さくら丸』論
（５２）『カンガルー・ノート』論（済み）
（５３）『燃えつきた地図』と『幻想都市のトポロジー』：安部公房とロブ＝グリエ
（５４）言語とは何かII（済み）
（５５）エピチャム語文法（初級篇）
（５６）エピチャム語文法（中級篇）
（５７）エピチャム語文法（上級篇）
（５８）二十一世紀のバロック論
（５９）安部公房全集全３０巻読み方ガイドブック
（６０）安部公房なりきりマニュアル（初級篇）：小説とは何か
（６１）安部公房なりきりマニュアル（中級篇）：自分の小説を書いてみる
（６２）安部公房なりきりマニュアル（上級篇）：安部公房級の自分の小説を書く
（６３）安部公房とグノーシス派：天使・悪魔論〜『悪魔ドゥベモウ』から『スプーン曲げの少年』まで
（６４）詩的な、余りに詩的な：安部公房と芥川龍之介の共有する小説観（済み）
（６５）安部公房の/と音楽：奉天の音楽会
（６６）『方舟さくら丸』の図像学（イコノロジー）
（６７）言語貨幣論：汎神論的存在論からみた貨幣の本質：貨幣とは何か？
（６８）言語経済形態論：汎神論的存在論からみた経済の本質：経済とは何か？
（６９）言語政治形態論：汎神論的存在論からみた政治の本質：政治とは何か？
（７０）Topologyで神道を読む（１）：祓詞と祝詞と結界のtopology
（７１）Topologyで神道を読む（２）：結び・畳み・包みのtopology

［シャーマン安部公房の神道講座：topologyで読み解く日本人の世界観］
（７１）超越論と神道（１）：言語と言霊
（７２）超越論と神道（２）：現存在（ダーザイン）と中今（なかいま）
（７３）超越論と神道（３）：topologyと産霊（むすひ）または結び
（７４）超越論と神道（４）：ニュートラルと御祓ひ（をはらひ）
（７５）超越論と神道（５）：呪文と祓ひ・鎮魂
（７６）超越論と神道（６）：存在（ザイン）と御成り
（７７）超越論と神道（７）：案内人と審神者（さには）
（７８）超越論と神道（８）：時間の断層と分け御霊（わけみたま）
（７９）超越論と神道（９）：中臣神道の祓詞（はらひことば）をtopologyで読み解く：
古神道の世界観
（８０）三島由紀夫の世界観と古神道・神道の世界観の類似と同一
（８１）安部公房の世界観と古神道・神道の世界観の類似と同一
（８２）『夢野乃鹿』論：三島由紀夫の「転身」と安部公房の「転身」
（８３）バロック小説としての『S・カルマ氏の犯罪』
（８４）安部公房とチョムスキー
（８５）三島由紀夫のドイツ文学講座
（８６）安部公房のドイツ文学講座
（８７）三島由紀夫のドイツ哲学講座
（８８）安部公房のドイツ哲学講座
（８９）火星人特派員日本見聞録
（９０）超越論（汎神論的存在論）で縄文時代を読み解く
（９１）「『使者』vs.『人間そっくり』」論

編集後記

●表紙：日本文化をトポロジーで解説する「内なる辺境」シリーズ（６）：凹に入れる：ついつい話が、落語なので、落ちてしまつたのはご愛敬。次回はもつと高尚にやります。●『周辺飛行』論（２３）：写真のぞき――周辺飛行２０：安部公房が如何にリルケであるか。ねりさんの言葉でどこかに書いてあつたが、安部公房の小説と安部公房スタジオの戯曲の関係を誰か説明して欲しいといふ言葉を覚えてゐますが、時既に遅きことなるも、この連載は期待に応へ得てゐると思ふ。もし安部公房のお墓に参ることがあれば、ねりさんに報告をしたい。●リルケの『オルフェウスへのソネット』を読む（５３）：第２部 XXVIII：”ああ、来い、そして去れ。お前、ほとんど子供であるお前よ、”：時間と未分化の実存と存在とリルケの詩と。これらは皆一つらなりの安部公房の世界の環になつてゐます。●サンチョ・パンサを求めて（５）：安部公房と三島由紀夫の超越論を理解する方法：三島由紀夫の命日に原稿を受け取って翌日訳し始めて気づいたことを書きました。二人の読者は此の本質に惹かれて読者でゐるのです。こんなこと誰も教へない。親も教師も誰も彼もが生きることしか教へないからだ。大事なことは自分の死ぬことを真剣に考へることではないのか？箱男みたいに。勝木博士みたいに。あの最後に泳ぎ疲れて尚陸地に手を伸ばす水棲人間の少年みたいに。

●*Mole Hole Letter*（２４）：1+1=2：積年の疑問が晴れました。理解が正しいかどうかは保証の限りではない。●ネット・メディア論（４）：４.４　日本国の位相史上のネット・モナドの位置/４.５　ネット・モナドの対象とする国家と個人(persoal)による監視・調査項目：これも積年の疑問が解けました。専門家は日本書紀は海外大陸向け、古事記は国内向けと誰もがいふのであるが、私には不審であつた。そんなことをするか？今の歴史家が日本史を書くときにそんなことはしない筈。やはり、我らはトポロジー民族なのである。その契機にお祓ひをするとは！神道はアニミズムで呪術であるか？そんなことを宣ふた輩は縄文人の鼻くそを煎じて飲ませてやる。ところで縄文人の鼻糞は遺跡から発掘されないものか？

●縄文紀元論：Topologyで日本人を読み解く（３）：２。日本語の音義と概念の関係：五十音表とは何か：これも永年の課題の一つでした。林武さん本当にありがたう。●ではまた、次号、

差出人：
贋安部公房
〒182-0003東京都調布市若葉町「閉ざされた無限」

次号の原稿締切は超越論的にありません。いつでもご寄稿をお待ちしています。

次号の予告

1。『周辺飛行』論（２１）
2。安部公房の縄文紀元論（２）
3。私の本棚：西尾幹二著『あなたは自由か』を読む～自由と奴隷について～
4。哲学の問題１０１（１１）：愛（Liebe：リーベ）
5。大久保房雄を読む（１）：文壇とは何であつたか
6。リルケの『オルフェウスへのソネット』を読む（５３）
7。サンチョ・パンサを求めて（４）：ドーナツの穴になつた話

【本誌の主な献呈送付先】

本誌の趣旨を広く各界にご理解いただくために、 安部公房縁りの方、有識者の方などに僭越ながら 本誌をお届けしました。ご高覧いただけるとありがたく存じます。（順不同）

近藤一弥様、池田龍雄様、中田耕治様、宮西忠正様（新潮社）、北川幹雄様、加藤弘一様、平野啓一郎様、巽孝之様、鳥羽耕史様、友田義行様、内藤由直様、番場寛様、田中裕之様、中野和典様、坂堅太様、ヤマザキマリ様、小島秀夫様、頭木弘樹様、 高旗浩志様、島田雅彦様、赤田康和様（朝日新聞社）、富田武子様（岩波書店）、待田晋哉様（読売新聞社）

【もぐら通信の収蔵機関】

国立国会図書館 、コロンビア大学東アジア図書館、「何處にも無い圖書館」

【もぐら通信の編集方針】

１．もぐら通信は、安部公房ファンの参集と交歓の場を提供し、その手助けや下働きをすることを通して、そこに喜びを見出すものです。
２．もぐら通信は、安部公房という人間とその思想及びその作品の意義と価値を広く知ってもらうように努め、その共有を喜びとするものです。
３．もぐら通信は、安部公房に関する新しい知見の発見に努め、それを広く紹介し、その共有を喜びとするものです。
４．編集子自身が楽しんで、遊び心を以て、もぐら通信の編集及び発行を行うものです。